
風の中から夢の中へ

椎名未来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の中から夢の中へ

【Nコード】

N2763V

【作者名】

椎名未来

【あらすじ】

第二次大戦後のもう一つの世界。

2007年、オセアニア周辺が大戦の影響でイギリスの植民地になっていた時代。オーストラリアは他地域を含めて独立を宣言、それと同時に日本では正体不明のテロ組織の犯行が相次いでいた。

テロ組織の男の子はオーストラリアと……ある女の子を助ける為に動き出す。

ネゴシエーター、自衛隊、警察庁、テロ組織メンバーの男の子、各視点で描かれる物語。

ブローグ

目をしかめながらパソコンのディスプレイを見つめる。

「うつわ……、やってらんねえ」

俺がそう、ぼーっとデスク越のテレビを見て言う。

この警察っていうのはどうにも暇で、どっちかっていうと鎮圧諸々は今のテレビに映ってる自衛隊が主。

「なので俺たちは暇なわけで」

ちらりとオフィスを見るけど、外務省出向の新人が窓際のデスクに、それに南の作戦傍受にいそしむ課員が俺含め八名。もっぱら俺はデスクワーク、

「って！」

俺がぼんやりそれらをなんとも感慨深げに見ていると、おもいきり後ろからひっぱたかれた。すぐに後ろを向くと長身にブラツクのスーツにブラウスの女性が目に付く。

「高木くん、あなたちゃんとやってって言うているでしょう。何度、言ったら、わかる、の」

言葉を区切りながらしばし遠慮なくタウンページを振り下ろしてくるのはどうしたもんか。

俺はその秀麗な顔に細いリムのメガネをつけた典型的（なんていったらどうなるだろう）美人さんに言う。

「ちゃんとやってますって真菜さん。ほら、自衛隊、今動いてる途中だし、オーストラリア連邦もイギリスもうごいてませんし。連絡待ちなんですよって！」

ふつと真菜さん、この長、警察庁情報局局长、佐々木真奈の攻撃を避けきると、ふーんと韜晦するように俺の顔をしげしげとみてる。見ていて悪い気分はしないがなんとも心臓にわりいもんだ。「まあ、いいけど。動きはないってこと？」

「ええ」

俺はげんなりしながらP Cを操作して、近似曲線、二項の定理からくる、各国の提示連絡を表示。

「今、発生している関東地区全域のネットワーク遮断、特に米軍と英軍との連絡遮断の首謀者は港区南青山にある五十階建てビル『ビルジビル』の屋上にいると判明。現在航空自衛隊傘下の情報作戦部四課が交渉中、他警視庁よりS A T、S I Tもろもろでてますね」

そう俺のやる気のない声にまた一発脳天にかましてくれる我がボスだけでも、データとテレビをみながら後ろでまとめて結い上げる髪を触って、

「やっぱりこれって南緯五度海域緊張の煽り？」

俺がP Cを切って、そのまま両手をひろげてテレビのほうを示す。相変わらずのデータ打ち込みと傍受に忙しい室内だけれども、実際は内閣の意向が強いらしく、次長もいやいややってるといふ噂。「むしろカーペンタリア紛争じゃないですかね。首謀者は高校生ですから」

ん？　　と首を傾げる真菜さん。おお、いい感じに幼げに見える。でもこれでも合気道八段。

「ほら、だから。二年前の自衛隊遠征派遣。日本のイージスが誤射で十隻沈没。当事者の英軍は慰霊金と謝罪だけ。国際関係悪化を嫌がった日本はそれで遺族を黙殺。その遺族ってーのが、」

「この子、ってわけか」

そういつてテレビをみる真菜さん。液晶フラットの左済みにはどこのテレビ局が映しているのだろうか、屋上に男性が一人、女の子が屋上落下防止用フェンスに座っているのが見える。というかさすが零次。

「遺族は偶然にも全員中、高生。まあ、だから納得もできるんですがね。でも、すぐに収まるでしょうよ。四課のエースの梶原零次かしわらいじですからあれ」

へえーとどうでもよさげに、いや真実どうでもいいだろうけど、

いってからバンつとタウンページを俺のデスクに放り投げる真菜さん。

「高木君の同期のね。ま、それよりも、」

そういつてテレビの中心のほうを指さす。

「こっちのほうの問題なんだけど」

俺はいはいと言って作業に戻る。PCをつけ、英軍の公式文書の偽証作成をしながらニュースの声を聞く。

『——七日、以前独立を宣言を宣言してから強行姿勢を崩さないイギリスの属州、オーストラリア他州はオーストラリア連邦共和国と名前変え、小規模なテロ活動を行っています。一九二〇年の第二次世界大戦後にイギリス属州となったミクロネシア、ポリネシア、メラネシア、オーストラリア地域は、その後も属州ながらも小規模な紛争はあり、それがいいよ、来月の国連による国際宇宙ステーション、ICPの完成を見ての独立と各専門家が述べています。これをうけ、国連メギル事務総長は七日昼にメルボルン入りをしており、一二カ国会議の早期開催を訴える方針です。しかし、一方のNATOの首脳の判断で、ソロモン諸島海域に国連平和維持軍、ISAFがNATO軍と展開する自体となっており、国連の総意と相反する形と——』

第一章 裁かれるもの

僕達が会ったのは偶然だった。

でも必然だったことは皆がわかっている。きっとどうしたってこうなったのだから。

そんなどうでもいいことが、偶然に偶然を重ねて、そして、絆を作ってしまったのだろうと思う。

僕達はどうしてで「あった」のだろう。

出会ってよかった。

でも

出会ってしまった。

「ねえ、カズミはどうしたの？」

僕がぼんやりと海をみていたら向かいの席に座っているシルフィに声を掛けられたので目を移した。彼女は南欧に特有の金髪碧眼で、その整った顔を心配そうな表情にくずして目の前のアイスココアを啜っていた。

「さあ。僕もよくわからないよ。最近はよく一人でパソコンにかじりついていたからさ。今日も三号館のトレーニング実習室じゃない」
僕は興味なさそうにそういうとまた海に目を戻した。僕はこの協

力ができているというのにお互いの腹をさぐりあうようなこの行為が嫌いだった。そしてこんなことぐらいしかいえない僕自体嫌いだった。もう少しいい方って言うものがあるのだろうが、いつもつき離してしまうような言い方になる。

「……じゃあ、トモユキのステディは？」

茶化していないというのがわかるよう、声はそのまま悲しげだった。僕は少し眉を潜めるだけで何も答えない。

やっぱりこういうふうにみられるのはいい気分じゃない。確かに回り公認の中だって言うことは僕だってわかってるけど、僕は十五歳なりに十五歳の意地、というか反発心がある。

しばらくして溜息についてシルフィーに向かって、

「ユイはまた海洋研究の実地調査に同行していったとおもうよ。ウエルズリー諸島で日本の海軍の残骸がみつかったとかさ」

「あ、ニユースでやってたの？」

うん、と僕が生返事をしてオレンジジュースを啜った。

半年前の日本の自衛隊海外派遣にともなって僕はこのリッチモンド州立大学付属高校（正確には中学校と高校をあわせたようなものだけど）に編入してきた。

お父さんは初めての海外派遣で、そのほかの友達のお父さんとかも一緒に派遣される、大規模なものだった。だから始めは渋っていたお父さんだったけど僕とお母さんを連れてこのオーストラリアまできた。

学校はなれなかった。日本大使館にある日本学校にかよってたけど、慣れしまうと外人と同じ教室で授業をうけなきゃならなくなった。そんな僕を、いや、僕達、をしきりにかまってくれたのがシルフィーとクニツク、ジュディ、クリストの四人だった。僕達は自然とまた四人だったのでいつしか八人でいつも行動するようになった。

なんでもない中学生、なんでもない十五歳の生活、ちよっと違う生活だった。

はずだった。

二〇〇五年一〇月一七日、早朝。物凄い霧の中、イギリス軍の海軍が警戒していると、何かが甲板に当たる音がした。その兵士はそちらを見ると同時にさらにヘルメットに何か当たり、その反動で持っていた小銃の引き金引いてしまった。

戦いはすぐに紙を燃やす火の様に広がり、イギリス軍、日本海上自衛隊、オーストラリア自治州クインズランド方面大隊の三すくみで交戦。結果三者とも甚大な被害がでた。自衛隊はイージス艦十隻は沈み、戦死者は三一人と戦後初めて争いでの戦死者。

同時に僕達日本人の四人の父親もその中に含まれていた。

僕達は落ち込み、なぜこんなことになったのだと大人達になんども怒り、悲しんで、そして疲れた。

結果は引き金を引いた兵士に水鳥が植物の種を偶然落としてそれが原因だったとされた。

くだらない理由だった。だから僕達は疲れた。

そしてそれ以上に僕達八人は結束した。いつも以上にどうしたらこの戦争がはじまるかもしれない状況を変えられるか話あっていた。自分達のような人達を出さないために。

自分達を救うために。

この状況を変えるためには「誰かが」、必要だった。そう、皆そうだったただけだ。

いつだったか、クリストが面白そうにいった。

「僕達はレアノアのようなだ」

よくわからなけどどうやら「集まり」って意味らしかった。そのときからしきりに八人の間でレアノアという言葉を使うようになった。

「ユイもあんなに真剣にならなくてもいいのに。どうせ僕達だけの力じゃ、解決しないさ」

シルフィーはふんつとはなを鳴らして僕に指を指して、

「あなた彼女、好きなんですよ。だったら一緒にいくべきだわ」

僕はそんな気はない、と両手をあげていらひらさせるとシルフィーはまた陰鬱な表情に戻る。確かに好きさ。ああ、大好きさ。でもユイみたく僕は真剣になれないのも真実だった。

だって利用しているだけじゃないか。

これが恋だというなら……

「これって本当に好きって言うのかな」

「え？」

僕の日本語の独白にシルフィーが首を傾げる。僕は少し、唇を上げて、

「俺たちはレアノアだもんな。互いを心配しないわけないだろ」

そういうとお互い少し笑う。海沿いのこのカフェテラスに強い太陽の光が入ってきて、シルフィーの影を薄くする。

「それでシル、お前はなにしてんだ？」

「サボり、中」

そう意地悪そうに微笑んできた。

僕達はいつまでこうしていられるのだろう。

そして優衣と和美の二人が日本に行方を眩ましたのが半年後だった。

オーストラリアその他の地域がイギリスから独立を宣言したのがあれから一年半後だった。

渡航は制限され、緊急事態宣言が本国から発令された。

僕達は同じ地上にいて分断された。

日本へいけたのは随分後になってからのことだ。

第一章 裁かれるもの 二

僕がいつも通り公園であき時間をベンチに寝っ転がって過ごしている、すぐ横のベンチに誰かが座ってきた。

僕は一人のほうが自分の時間というものを堪能できると思うので、めんどくさいけど別のベンチに移動しようと体を起こそうとした、が。

「あ、うわ！」

一時間ちよい、変な格好で寝ていたので身体を起こそうとした右腕がまったく麻痺していて、情けなくも変な声を出しながらベンチの前にすっころんだ。両足が上にふられて一気に青空が視界に入ると同時に頭が地面と衝突した。

——ヤバイ、誰かに……、見られてるかも。ぐあ、恥ずかしい、とつとここから……。

「おい、大丈夫か？」

身体を起こそうとしたら後ろから声を掛けられた。

上下が紺のスーツにシャツは薄い黄色。この暑いのにクソマジメにネクタイをちゃんとしめているのが違和感がある。スーツの上着は左手で肩にひっかけ、口にタバコを銜えたその顔は二十代のような大学生のような、高校生と言われればそんな感じもしない、下品な冗談ばかりいって一人笑ってそうな容姿だった。

「おい、ほら」

そういつて男は右手を差し出してきた。……まあここで警戒しても意味がないし。

「……どうもっす」

僕はそういつて男の手を握り身体を起こす。ぱんぱんと学ランについた土を払っていると、

「あーあー、随分汚れちゃったなあ。ていうか結構面白かったぜ？」

すんげえ変なこけかたしてたし。それに『うわ』、だもんな。は。俺も昔女子高生のパンチラ見ようとして同じことしたことあったよ」

それではははっ、と笑ってタバコの灰を落とす。

……………なんだろ、この人。なんか物凄い関わっちゃいけない感がばりばりしてくるのでとつとこの場から逃げたほうがいいかもしれない。僕はそれほど初対面の人との耐性がない。

「あの……、じゃあ僕はこれで……」

そう言っ て立ち去ろうとすると、

「ああ！ 待てよ待て。気に障ったんなら謝るよ、すまんすまん。とりあえず座ろうぜ。暑いし」

そういうと僕の了解も得ずにとつとさっきまで僕が寝ていたベンチの横のベンチにどっかりと座る。

そしてまたタバコの灰を捨てると、ぼーっと突っ立ってる僕のほうを見て言う。

少し首を傾げた。

「何してんの？ 座れよ。暑いだろうそこ」

「あ、はい」

あ。

なんか返事しちゃった。まあ、いいか。僕は流されやすいんだ。

そして僕がベンチに座ると早々に男が言った。

「しかし学校サボっちゃあんまりよくないよ。桜庭高校二年四組十八番の青山隆介君」

「……………えっ」

僕が驚いて男のほうを振り返る。男は相変わらずひひひっと、笑うとフィルターぎりぎりまで吸ったタバコをゴミ箱に投げ捨てる。

「あの、な、なんで……？」

「ん？ ああ、いや別にサボんのはいいんじゃないの？ 俺も高校の頃はしょっちゅう……」

「いや、じゃなくて」

「ははっ、と男はまた笑うと、

「あんまり怒るなよ。お前牛乳飲んでるか？ カルシウムな。別になんでもない。ほれ、これ」

そう言っ僕に僕の膝にカード状のものを放ってくる。学生証だった。

「ほらさっきお前起こした時にさ、落ちてたから」

「……………」

「なんだこの人は……。」

スリか詐欺師か、またやなにかの殺し屋か。そんな臭いまでして来る。

『そんな状況に僕はあるんだから』警戒してもいいかもしれない。僕が胡散臭そうな目で見ていることに気づいたのか、男はおやつと言う顔をした。

「ああー、そんな警戒すんなよ。別に俺はお前を誘拐だの、誰それさんに頼まれたので殺しに来ました神に祈る時間をあげましよう、なんてことするつもりねえよ。誘拐すんならお前より女子高生のほうが何ばかいだろうし、そっちのほうが色っぽい」

なんか言ってることがどっかの漫画で見たような記憶があるので、意外に若いのもかもしれない。ただ何にも考えちゃいけないだけなのか、もしれない。

「別に俺はちよつとこれからあー……、なんつーか仕事でお前と同じ高校の生徒と会いに行くからたまに見るかけて、そんで公園だったもんだからちよつと息抜きにやすんでこうかなあってただだよ、連れに頼んで」

「連れ？」

僕がそう言う公園の入り口を親指で示し、僕が見るとなんかどこでかい白いバンが止まっているのがみえた。あんまり距離が離れて

いないので運転席のハンドルに両腕をかけてうつ伏せで寝ているだろう女性が見て取れる。

「俺たち最近まで労働基準法クソ食らえって言う感じのすっ飛んだ仕事終わったばかりなのに、ったく、また仕事なもんだからこうやって現場に行く前におサボり中ってわけさ。お前は？」

「……俺もサボりです」

ひひひっと、男が笑うとそら見ると言った。僕も少しにやりとしてしまう。なんだかこの男性はひとなつっこい雰囲気もあいまって直ぐに人の警戒をといてしまうような空気がある。

「桜庭ってあれだろ？ 結構名門の進学校だろ？ まったくなんでこんなことばかり……」

「こんなことって？」

僕がそう言うとなんかはああ、いやいやと左手を振ってなんでもないこつちの話、と言った。なんか苦い顔していたけど。男はまた新しいタバコを出すと火をつけた。

「んでお前は何？ なんか嫌なことでもあったわけ？」

男はどうでもいいように、ゆっくりと言った。

「進学校ってわかってるならだいたい予想がつくじゃないすか。勉強すよ。なんつーか嫌になつて」

ふーん、と男は口から出るゆらゆらと空に昇っていく煙を目で追っている。

「あーじゃあさあ、お前みたいなのっていっぱいいるわけ？」

「僕みたいなのって？」

「だからサボるヤツ」

「……どうなんだろう。」

「友達とかはマジメなやつばかりかすから。まあいるんじゃないすか。」

男は妙に納得しているようで、ふんふんと頷いて僕の言葉を租借しているようだった。

はせがわかずみ
「長谷川和美」

男は突然そう言った。知ってる名前だった。僕のクラスの子だ。男はさっきまでのふざけたにやにや笑いをやめて真剣な顔を向けて僕に言う。

「お前そいつのこと知ってる？　これから会いに行くっていうの、そいつなんだけど」

なんだろう。本当になんならうこの人。でも自分の素性まで知られているし、別に喋ってもいいかもしれないと思う。

そう間違っと思ってしまった。

「そりゃ——知ってますよ。同じクラスの子です。えーと……、可愛くて、勉強にスポーツになんでもできる子の典型的な子ですよ」ふんと男は鼻を鳴らして下を見る。なんだかそんなもんは当のつくの昔に知ってるって感じだった。それとも僕の評価に不満を持ったようにも見える。

「そいつってなんか変わったこととかないわけ？」

「……？　変ったこと、すか？」

「そう」

んー……、別に何もないけど。

「ああ、なんていうか暴力的っていうか、結構危険思想いっぱいでしたね。なんかそっち系の情報とかいろいろしってるみたいだったし」

「へえ、あーじゃあ、」

プップーっと車のクラクションの音がした。見ると例のデカイバンの乗ってる女性がいつの間にか起きていて、早くしろと催促しているみたいだった。男は、ったく、あと少しの、とか意味のわからないことを言いつつ、

「見ての通り、俺はお仕事タイムのようだわ。んじゃもう行くから」
「あ、はい。えっと、仕事頑張ってください」

男はお前はいいやつだなと笑いながら僕の頭を撫でようとして、

「っ！ 熱っ！」

下を見ると左手にタバコの灰が落ちていた。まったく何すんだよ、と男に文句を言う前に、

少し。ほんのすこし針でつついたような痛みが右腕に走ったけど、

左手のやけどでそれどころじゃなかった。

「ああ、悪い悪い。たばこ持ってたのすっかり忘れてたなあ。ところで今何時？」

「え？ あ……午後一時二十分……？」

「おー、そんな時間か。あとお前が所属してる部活は？」

「あ、え？ それって——」

男を僕は必死に見ようとすると目が眩がそれを許さない。

急激な眠気と全身の倦怠感が一気に押し寄せてきた頭がふらふらと左右に揺れる感じが伝わってくるとそれで限界だった。

そのまま横に傾いでベンチに寝っ転がった。いや、倒れた。

男はわざわざ僕の視界に入ってきて、言う。

「いやいや……。最近のガキは口が堅いんだな。あーんまり情報は得られなかった。まあ、元々期待はしていなかったけどな。いや、情報はなかったに等しいな長谷川の彼氏さん」

こいつ——、それは……。

「宮崎の言うとおりだった。とんだ無駄骨、って俺の見当違いか。……っ！ か保険なんだから見当違いって事もないか。ああ、心配すんなよ。お前はただ寝て、起きるだけだ」

……？ ……………？

「じゃあな、ああ、そうそうまだ名乗ってなかったな。俺は武藤。」

情報作戦四課の室長つてのが、——って覚えてないか」

そう言っつて男が僕の前を立ち去り、そこで意識が途切れた。

「……ん」

僕はのっそりとベンチから身体を起こした。なんだろう。今まで何をしていたんだろう。

とても頭が重いような。全力で走って冷や汗がでて出し尽くしたような、そんな疲労感。

ベンチなんかで寝てるからだろうって感じた。今日は和美と一緒にサボって遊ぶ約束だったのにすっぱかされてここで不貞寝してた、はずだ、よな。

「あー……、なんだろう。変な感じ」

さっきまで誰かといったような、話していたような感じもするし、でもそれは夢の中の出来事のような気もしている。ふと変なことに気がついた。

寝ていたベンチが一つ、公園寄りだったことと、左手に何か焼けどの跡があったことだった。

「あー、本当にサボれたらいいのになあ」

「なに言っつてんのよ」

白いバンの中で一組の男女が話している。その一人はさっき公園で話していた武藤だった。

「私の言う通りだったでしょ？ 彼氏なんか当たってもウチの四課

の情報のほうがマシだつて」

「だーからサボるために行ったんじゃないか」

「……ばっかじゃないの」

武藤は大学生のような若い相貌の顔を歪めて笑い、

「いいだろうがたまには。少し休憩つてことでさ、これも保険なんだしこういう小さい積み重ねが解決に繋がんだよ」

いかにももつともらしいことをいう武藤に対してそれを聞いた女性性は相変わらず眉を顰めながら言う。

「彼に使った薬、ラインアルトカクテルの量はちゃんと守ったでしょうね？　こんなくだらないことで死人でたらあんたも私もクビよ？」

「だーいじょぶだつて。お前の言うとおりやったつて。それよりこれから本当に死人出る確率が高いほうにいわせればまだマシだろ」

「……まあね」

そう言つと二人は無言になり、大型の白色バンは料金所を通過して首都高速道路に入つていった。

第一章 裁かれるもの 三

都心に近いある一つの高層ビルの屋上、正確にはその屋上にある落下防止用のフェンスに少女が一人、絶妙なバランスで座っていた。膝にはバームトップ型のパソコンに耳にはワイヤレスイヤホンマイク。

地で茶色い綺麗な髪を両側で結んでツーサイドにしている。その髪がビル風になびき、そして少女の身体もすこしばたつく。

「うん。大丈夫だよ。こっちはうまくいつてるから。もしものときは、……あ、いや、これは私の独断だからフォローは気が向いたらでいいよ」

少女は友達と明日どこへ行こうか、カラオケは飽きたから遠出でしようか、といった感じで、歳相応に楽しげに会話していた。実際口元は綻んでいるが、しかし目の前のパソコンのキータッチは止まらない。

「うん、うん、……わかってる。あ、ごめんちょっと待って」

そう言うときスカートのポケットからリモコンらしきものを出して、パソコンのモニタを見ながら、なんの躊躇いもなくスイッチを一つ押した。

するとゴゴゴンっ、と地鳴りのような、地下鉄が傍を通り過ぎるようなくぐもった音がビル内から聞こえ、そしてだんだんと静かになっていく。

だが屋上だけは静寂だ。相変わらずのビル風に小女の長い綺麗な髪が遊ばれる。

「あ、ごめんごめん。お邪魔が入ったから消してた。うん、大丈夫。……え？ 『レアノア』は動かせないよ。うん。じゃあ、そうだね

え、また何かあったら連絡するよ、うん、またね——」
少女は本当に嬉しそうな笑みを浮かべる。

「——優衣^{ゆい}」

□

「しかしだなあ、こんなご時勢だつてのに俺たちが出張る理由つてのはわかるか？」

高速を近場のインターチェンジより出て、一般の幹線道路を走る白いバンの中で一見若いようだがよくみれば毎日のように続く激務のせい、目の下にはクマができて二十代半ばと誰でもわかる容姿の男が横の女性に話しかける。しかし相変わらず眠たそうな、余裕がありそうな顔は変わらない。

「なによ、急に」

女性は男のいつもとは違う口調に訝しげに眉を顰め、道路を右折する。女性は細いリムのメガネをかけた秀麗な美人の顔立ちだった。しかし来ているのが紺のパンツスーツにブラウスなため、あまり目立たない恰好になってしまっている。こたわりでもあるのか髪に花柄のガラス細工の髪留めをつけていてそこだけ際立っていた。

「別に。このままだと俺が寝ちまいそうだから」

「寝たらぶん殴るわよ」

そんなこと言っただけで、と男はリクライニングさせた助手席で両腕を頭に組みふぁーっとあくびを一発かます。

「昨日だって家屋全壊だの、人殺しだの、そんなの警察でも消防団でも商工会議所にでもまかせとけてのに……。下のほうで緊張状態だからってウチラが引っ張りまわされてさあ。テロじゃねえだろどう考えても、ったく」

「ふーん。それはご愁傷様ね。私、昨日は五時で上がって焼肉食べてたわよ」

ふんつと男は鼻を鳴らし、あくび交じりにまた言う。

「んでー……、なんでかわかるか？」

「さっきの？ 答えは自分で言ったじゃない。緊張状態が続いてるから、なんかことあることにテロだって思っちゃうんでしょ」

「まー……そうなんだがなあ」

女性がハンドルを回して公園を左折すると、目の前に天を突くような巨大なビルが見えてきた。見方によっては五十階はありそうだが、ところどころから煙が上がっているのを見ると尋常じゃない雰囲気伝わってくる。しかしバンの中の男女はそれをぼんやり見つめながら、少しもそんな緊張感の欠片もなく話し続ける。

「それもあるけど、つまりは警察だっているいろやるけど結局わからなくなつて損害が大きくなると俺たちに回しちまうのさ。『もう手に負えません。こっちはほかにも事件が抱えてんだためえら暇なら動け、税金ただでもらつてんじゃねえぞ』ってことさ。まあつまりは面倒事の押し付け合いつてわけだ」

「ふーん……。あ、だから最近空自の災害出動とか多いわけ？」

いやいやと男はめんどくさそうに右手を振る。

「空自だけじゃない。陸自だって海自だって機動隊だってとにかく武装して銃もってる集団ならどこだって緊急出動って感じなんだわ」
女性は赤信号で車を止めると思案げにちよつと考えて、

「じゃあ、昨日一緒に焼肉食べた早川に悪いことしたわね」

「なんで？」

「明日も仕事なんですよー先輩ーって言ってたから。今頃空母にでも乗って太平洋上じゃないの」

はー……、そりゃ大変だと男は全然大変そうじゃなく言う。

「でも早川は今現場いるぞ」

「え？ なんで？」

「呼ばれたんだと、よ。上に」

ふーんと女性は言うど、

「やっぱなんかおかしいわね」

「だから俺がさっきから言ってるだろ。実際、完全のA装備で連絡のあった現場行くとなーんにもなくてな。そんなのもう十回や二十回じゃきかねえくらいある。意図的に振り回されてるって感じ、してくるだろ」

そう言ってもう目の前の見上げるのも億劫になるぐらい高いビルの頂上を指差す。

「その原因が長谷川ちゃんってことね」

「そ。一応防御に回って中央は守ってるけどなにせ人が足らなくてそこらへんのもぐりのハッカーやらも集めてプロテクトって感じ」

「でもそれだったらあの子たいしたもんだわね。米軍との連絡完全に遮断したんだから。もう少し幕僚のジジイ共が予算降ろしてくれたらもつといいの作れるのに」

目の前にはもうビル入り口が見え、その周りを警官が野次馬やら報道陣やら車やらを近づかないように押しとどめている様子が見える。雑踏はどうでもいいが、それを押し留めている警察関係者は明らかに混乱しているのがわかった。

「まあ、その技量は買ってやってもいいな。コレ終わったらうちにスカウトするか？」

「そんなことしたら鼻フックしてあんたの首ひっこ抜くわよ」

おー怖、と男が苦笑するとサイドブレーキの後ろにあるテレビリモコンを三枚に重ねたようないかつい無線機がピーピーと鳴る。

それ聞くと男はまるでさっきとは別人のように無線機を引っつかみ口に当てた。

「武藤だ。状況は？ …… ああ、もう目の前だちゃんと全員揃ってるか？ ああそうか……」

女性のほうは、武藤の話聞きながらビルの地下駐車場に野次馬をさけて入り口から入り、そのまま同じような大型バンが止まっている集団のところに向かう。

「は？ 梶原が？ はー……、んじゃあいつになんとかしてもらうか。ちょうど適材適所だろ。労災はおりるって言っとけ。ん？ 宮崎？ ああ、わかった」

そして横の女性、宮崎に武藤がんつ、と無線機を渡す。宮崎は何も言わずそれを取り、

「なに？ ああ、わかったって。それはそっちの分野でしょ。畑違い。もう着くから」

そう言うのと早々に無線を切った。

「なんだって？」

「先輩なんとかしてくださいーだって」

あそ、と武藤はリクライニングを起こした。バンはまるで野営のテント張っているかのような集団の横に駐車し、そのまま武藤と宮崎は降りる。

「お疲れ様です」

黒服で地下だと言うのになぜかサングラスをかけている中肉中背の男が武藤に近寄ってきて言う。

「全員配置についてるか？ 準備は？」

テントの中に入りながら、さっきのぐーたら男とは見間違つかのようなしゃきつとした感じに宮崎は少しほくそ笑みながら後についていく。

「ダメですね。三十九階までが最高でそこで吹っ飛ばされました。

警察の一機の二名が死亡、五人重症です」

「ふーん、なんかゲームみたいだな、とかいったら一機の隊長にタコ殴りにされるな」

でも発言の内容はあんまりかわらないようだった。

「そんでウチの梶原はどこにいる？」

「四十一階。ちょうど先頭にいたんで爆発はさけたようですね。ラッキーだとか助けてとか言っていましたか？」

「そのまま上に行けって言っとけ」

「は？ しかし、」

「いいから」

「わかりました」

そう言つと同じような黒服は同じような集団に走つてテント内に戻つて行き、野戦服をきた見れば明らかに自衛隊の隊員達が何十と設置しているコンピュータを前にわきめもふらずなにか作業しているテント内に武藤は入つて言つた。

武藤はそのままその一番左のテーブルで作業してるWAC（女性自衛官）に近寄つていく。隣りには宮崎がおり、なにやら指示を出しては考えていた。と武藤に目をやり、

「柿崎なんだつて？」

「一機の葬式には何送つたらいいかわかりませんでした」

「あそ」

宮崎はそのまま考えるように右手を顎につける。服装が派手じゃない分、あまり目立たないがよくみれば美人というのが宮崎がうけている周りの評価だ。

「あ、武藤さんお疲れ様です。ちょっとこの子かなりぶつとんでますよー」

早川がパソコンのキーをたたきながら言う。四枚の液晶ディスプレイには目まぐるしくデータが入れ替わっている。

「ん？ おい、どうなつてんだ今」

今度は宮崎に言う。

「どうにも長谷川ちゃん、ビル全体の警備システム乗っ取っちゃつてるみたいね。あとトラップが」

「千二十一箇所あります」

早川が言葉を繋ぎ、宮崎は肩をすくめ、どうする？ と武藤を見る。

「ていうか、明らかに外に協力者いるんじゃないの？ これ」

「いえ、」

早川が野戦服の帽子的下から武藤を見上げパソコンの液晶画面を叩く。

「六時間と三十八分前に第十三B―九九九プロテクトをこのビルのサーバー含む全てのネットワークで展開中です。よって外部からの干渉はあと七十九時間は不可能なので……、多分トラブルばかりは誰かがやったんでしょうけど、このサイバーテロはあの子一人でしょうね」

「おおー。ハッカーのアルバイト君たちはちゃんと働いてるようだね。感心。しかし、たしかにぶつとんでるな。まあーじゃあー外部の干渉は無理ってんならあれしかねえかな。もう」

「あれって？」

宮崎が嫌な予感がする。と言う感じで聞き返した。武藤と言う男は解決するなら駆逐艦に漁業の民間船をぶつけるような男なので嫌な予感がする。

「簡単。このビルにくる電気を『すべて』こないようにすればいい。あとは梶原におまかせってことで」

「え、ですがそれではここも使えなくなりますが」

早川の応答に武藤は手を振りながら、

「ここ、商業ビルなんだから地下に自家発電だがあるだろ？ それ拝借すればいい。もちろんあっちにいかないようにな。物理トラブルだけならあいつでも突破できるからなんとかなるだろ。ほら、決まったら動け動け！ 野郎共、まずは電力会社に送電ストップさせる。できなかつた区ごた。あとは地下に送電線がないか確認しろ。宮元、お前は隣のビル行つてS A Tについて状況報告。柿崎と奈場と薄野は十階で待機して無線の中継基地を作れ」

そこまでいうとまわりの動きがさらにあわただしくなった。武藤は宮崎を見ると、にやりと笑い、

「さてと。これで米空も見直してくれるかな？」

「無理よ」

苦笑する宮崎を横目に武藤は無線機をとり、チャンネルを合わせる。

「武藤だ。梶原、今から指示を伝えるぞ。もう一回きいたらためえ

の今月の給料無しだ」

早川はその姿をみつめ、その早川の後ろで七十八時間三十二分二十一秒と刻々と時間が過ぎていく。

「だからあ、今はそこに誰もいけないっていつてんだよ、は？ だから無理だつて。……そうそう、へ？ おまつ、ちよつとま、」

武藤は無線機を耳に当てた格好のまましばらく止まって、はあ、つと盛大にため息をついて苛立ち気に無線機をテントの中央に置かれているテーブルにガツンつと置いてどっかりとパイプ椅子に座る。「その様子じゃまた梶原くんは単独つっぱしりのようね」

宮崎も少し嘆息する。

「ああ。助けるのは無理だから援護が行くまで待てつて言うとな、今度は逆にじゃあ僕一人で説得しにいきますなんていいやがつて……。あーあーこれだからキャリア上がりは嫌なんだよ。普通一課だろ。あいつみてえなのいるの。採用したの誰だよ」

「採用のハンコ押したのあんたよ」

宮崎がコーヒーの紙コップを武藤の前において自分もコーヒーを啜りながらパイプ椅子に座った。

「……そうだっけ？」

宮崎はもうそんなのどうでもいいという感じでそっぽを向くと、「でも梶原くんならなんとかしてくれる……ていうかこれで事件解決じゃないの？」

「……そうなるといいけどなあ。一応ネゴシエーターだし。今日は風呂にはいれっかなあ」

武藤がふけくさい頭をがりがり搔いた。

第一章 裁かれるもの 四

ブリッジビルから約四百メートルはなれた同じ港区内の高層ビル。四十五階と階数は少ないものの、建て増しをしている分、高さはほぼ同じだった。

その屋上に件のビルをライフルのスコープで見守る人影が一人とその横で双眼鏡で見ているのが一人。

二人ともうつぶせになって微動にしない。

「クリスト。退路の確保は？」

スコープをのぞいている少女が横の栗色の髪を持つ白人の少年に声を掛ける。少年も同じく双眼鏡で観察したまま、

「大丈夫さ。買収した仲間がジェットヘリで来る手はずになっているよ。もっともうち落とされなければ、の話だけだね」

そういつて少し微笑する少年の顔を少女が一瞬だけ盗み見て顔をしかめる。

「あなたの速い仕事には感謝するけど、もっと仲間は大切にすべきね」

すこし声を荒げるように言うが、少年はふん、と鼻で笑い、

「仲間……ねえ。この場合、いったいなにが仲間で何が仲間じゃないかというところから始めなくちゃならないけどさ。『レアノア』である僕らに他に仲間はない」

自分の意思を断言するような発言に少年も、少女もお互いブリッジビル屋上を監視しながら黙る。少女が持っているライフル——VSR10の改造銃——は最大射程が約一〇〇〇メートルと巨大だがそれをあてるだけの技量を少女はもっていた。少女は今にも引き金

に手をかけて、屋上に入ってきたものをすぐにでも撃ち殺す構え。
「『レアノア』はこんな目的のためにつくったんじゃないわ。南北
の友好関係の狙いが本来の目的だったじゃない」

少女の悲しげな英語の独白に、少年はなにも答えず、ただ双眼鏡
でビル内を観察しているだけだった。

ふいに少女のワイヤレスイヤホンマイクにピピッと通信受信の通
知音。

『優衣、面白いのがきたわ。とりあえずいれるから、フォローよろ
しく。でも最悪の場合になっても手をだしちゃダメ。そっちは逃げ
てね』

「……わかった」

少女は強くグリップを握る。

「これで八十三個め……っ」と

僕はそう一人で呟いて非常階段に仕掛けられていたパイナップル
(手榴弾)のブービートラップを解除するとまた登って行く。先に
このビルに機動隊は五回の侵入を試みたが全て失敗。それも各フロ
アに仲間がひそんでいるのではないかと考えて階段からいったのだ
が二重三重に張り巡らされたトラップに大人数ではひっかかるの当
然だった。というわけで。

「非常階段つてのは意外に安易だったけど……、当たり前だったな
あ……」

ビル内に作られている非常階段ならそんなデカイトラップは仕掛
けられない。通常の階段ならまだしも非常階段は「エレベータと階
段に隣接しているため」そこふつとばせば自分の逃げ道もなくなる
というわけ。

「……でもこの仕掛け具合からしてまるで逃げ道なんてなくてもい

いような感じだな」

たいてい、こういった場合の犯人は自殺つてというのが考えられるけど……。

「女子高生相手じゃ、あんまりだなあ。ま、そこは僕の腕次第つてことで」

そんなくだらないことを考えているとあつさり最上階の五三階に到着。ここから通常階段から屋上にでなければならぬ。

僕は一応用心しながらドアをあけフロアにでる。確かこのフロアは社長室と秘書室、会議室くらいしかないはずだからざつて見渡すだけでフロア内を確認できた。ふむ。まあだれもないが、問題は……。

「これだよなあ……」

通常階段の前には厚さ三十センチはある防火扉が降りてしまつてゐる。僕の専門は人間であつて電子系はまつたくの門外漢だ。ここに早川さんでもいたら目をランランと輝かせながらこの扉を数秒もたたずに文字通り「バラバラ」にしてしまつたろう。

「なんていったら殺されるな……」

ふうつと僕は防火扉のよこの壁に背を預けた。単純トラップなら訓練でのスキルで切り抜けられたがこういう融通の利かないものはどうにもなあ。

「しかし……」

僕は目の前の廊下、数十メートル先のドアの上にある「社長室」というプレートを見る。どうしてトップに立つ人というものは一番上、という場所に自分のオフィスをつくるのだろうか。日本人ならいざ知らず、アメリカ人だつてフランス人だつてそうだ。べつに受付の横の守衛室の横の部屋に作つたつて、営業課の隣りに作つたつて社長の業務には支障はないはずなのに。これなら今起こつてるようなテロが起こつたとき、在室時間さえわかれば外から狙い打ち放題だ。と、

僕の横の防火扉が勝手にゆっくりキシキシと音を立てながら上が

り始めた。僕はくだらない益体事を考えるのをやめてそれを見るとガコンッと完全に上に上がり、屋上への階段が姿を現した。

「……自分でやりましたっていったら武藤さんも少しは大人しくなってくれるかな」

そういいながら、このフロアに出てからずっと僕監視してた監視カメラに手を振り、階段を登って屋上の扉を開けた。

「こんにちわ」

高い、女子特有のソプラノが数メートル離れているというのに僕の耳まで聞こえてきた。長谷川和美は相変わらずこちらに背をむけたまま、

「とりあえず隣りにすわりませんか？」

自分が座っている落下防止用の「フェンスの上」の隣りを示した。

第一章 裁かれるもの 五

「人を殺したいと思ったことはありませんか？ 刑事さん」

横の和美ちゃんは膝に置いたバームトップ型のパソコンに目をこらし、時折キーをたたきながら僕に問いかける。

「ずいぶんな質問だね。でも僕は刑事じゃないよ。一応自衛隊のほう」

ふーんと和美ちゃんは足をぶらぶらとさせる。数メートル先は何もない、資料によれば三九二メートルの落差があるだけだ。それにしても風はなく、僕たちの会話は途切れることなく続く。

「じゃあ自衛隊のお兄さんで。で、答えは？」

「そうだね。そりゃ人間だから僕もあるけど、その質問の問題の核心は実際に実行できるかどうか、だろ？」

そういうと初めてにこつと笑う、が相変わらずパソコンに目を落としたままだ。

「その通りだね。たいていの人はそう考える時もあるけど実行するには及ばず、それでおわっちゃうわけ」

ふー、と息をつくと、

「じゃあ殺されると思ったことは？」

「うん？ それはさすがにないな」

「私がありますよ」

「どうして？」

「人を殺したことがあるからですよ」

「……………」

「理論的には実に簡単。実際殺してみて、『自分もだれかにこうい

「うふうに殺されるんじゃないか」という無意識にうもれていた感情が出てくるんです。当事者にしかわからない当事者だけの感情。だからこそ人を一回殺してしまった人は殺しつづけなければならぬ」「……ふむ。一種の麻薬みたいなものかな？ 殺したという不安がさらに駆り立てる。でもさっきもいったように一回やったとしても絶対にそうなるとは限らない。それじゃあ殺人鬼が右往左往しちゃうよ」

ふふふつと和美ちゃんは僕の台詞のどこが可笑しかったのか少し笑って、

「それもその通り。まあこれは個人の理論なんでほつといていいです。それでは人が人を殺す理由というのは？」

「……僕はこれでも一応人を助ける立場なんだけれどね……。それはとっさに、とかつい、とかじゃない？」

「んーん。六十点だね」

「それなら単位はもらえるよ」

「そうだね。でも私は『障害』になったからこそ人は人を殺すと考えるの」

「障害……」

「そう、障害。俗っぽくいっちゃえば道にころがってる石を蹴飛ばして遡行に落とすのと同じ。自分の人生に障害的なものが発生したらそれを排除しようとするのは自然だからと思う」

「それはまた極論だね。じゃあなんで障害になれば殺すんだい？」

「いい質問ですね。それはまたまた簡単。私が言っているのは人間関係のことです。その中で生まれる殺意のことです。人間だれかと仲良くするからこそ関係がうまくれるわけですが、それでは絶対的な矛盾が出るんです」

僕は自然と腕を組む。

「誰かと仲良くするということは誰かを選ぶ、ということであって、逆説、それは誰かを選ばない、ということが必ずおきるわけです。選ばれなかった人間はよほどの場面がない限り殺意は芽生えません」

が、そのようになるなら、芽生えると考えるのは十分です」

喋っている和美ちゃんを僕はじっとみつめる。長い、きめ細かいそれを後ろで一つにまとめたさらさらの自然な茶色の髪。生真面目に制服を着て、資料どおりの可愛い容姿。

「ふむ。和美ちゃんの考えはわかった。でもそれでも殺人は許容できるものじゃないよ」

僕がいうと、和美ちゃんはふふっと笑う。

「私はできます」

「おや？ はじめて意見が分かれたね」

「そうですね」

そうして初めて僕をみてにつこり笑う。さてさて……。どうしたもんか。説き伏せるのが不可能なら少々癪だけどワイルドカードをだすか……。

「もう一度いうけど殺人というものは許容できるものじゃない。色々な理由はあれど、殺されたほうはそれで終わりだ。殺したものは誰一人かまわず地獄に落ち込むべきだと思う」

少し語調を強めてみた。が

「しかし、殺したほうがそんなことを感じなかったら？ それで障害が取り払われたならどう思えます？ 嬉しいと思いませんか？」

「それは違うね。僕としてはそれは、言っちゃ悪いけど人間じゃない」

そういうと和美ちゃんは不思議そうに首を傾げる。

「人間と言うのは多かれ少なかれ、感情移入できる生き物だよ。できるからこそ、かわいそうだなとか、幸せそうだな、とか僕もあなりたいとか、思うわけさ。でもコレにはデメリットがあるのはわかるよね？」

和美ちゃんは答えずに頷くだけにした。

「つまり逆の負の感情、あいつをけおとしたい、奪ってやりたい、うるさいからいなくなってほしい、そして殺したい。つまり感情移入できることは人間に生きるうえで必要であり不必要なのさ。そし

て和美ちゃん。君は許容できるって言ったよね？」

「いいました」

即答。

「それは人間として重要なそれが欠けているのさ。つまり人間じゃないっていうのはそういうこと。感情移入の正負が拮抗していて自分の欲求というものを始めて抑えられる。僕は医者でもなんでもないからわからないけど、和美ちゃんがそういうなら君は正の部分が人間として欠けているんだよ」

少しひや汗がでてきた。まるで綱渡りしながら会話してるかのようだ。一歩間違えれば即落下。まあ四百メートル級の高層ビルの屋上フェンスの上に座っていても冗談にもならないけど。

ふふつと和美ちゃんはまたわらってパソコンのキーをたたく。

「それは新しい意見ですね」

「否定はしないのかい？」

「ええ。自分でもそう思い当たる節がいくつかありますから。ごどもの頃からそう思ってきたんですよ。いい意見をもらえて嬉しいです。ええつと……名前まだきいてませんでしたね」

「梶原玲次。航空自衛隊の傘下にある対テロ対策部隊の情報作戦四課のペーペーさんだよ」

「じゃあこの事件解決したら給料あげてもらえるように上司に頼んだらどうです？」

「どうかなあ。あの人は人使い荒いから」

僕がははつと笑い、和美ちゃんはにこつとした。

「じゃあ欠けている人間はこの社会では生きていけないですね」

そう結論めいたものをいった。そろそろか。

「いや、そういうわけじゃ、」

「いえ、いいんですよ。私もつねづね考えていたことで梶原さんに言われなくても自覚、自認していたことなんです。あなたを招き入れて正解でした。最後の最後の結論が出てよかった」

「……………」

「これからこのビルしかけた爆薬、まあC4とかいろいろですが、それをいつきに爆裂させます。地下にいるお仲間さんには悪いですが。それともさっきからスーツの下から狙ってる銃でこのキーを打つ前に私を撃ちますか？」

おっと。……普通にばれてるし。普通に腕組みしたつもりなんだから。

「まあ、君見たいな可愛いこと心中もいいかもしれないけどそれに水を差すようですさらに悪いけど」

「なんですか？」

「君が始めに殺したといった彼氏は生きてるよ」

ワイルドカードを出した。

「え？」

和美ちゃんが驚いたのは僕の台詞と自分の左腕にささった麻醉銃から発射された矢羽が突き刺さったことだろう。

そしてそのまま和美ちゃんは、力が抜けるように、

落下した。

フェンスの後ろに。

「ふう……………」

このためにここまで和美ちゃんの話に付き合い、スキをうかがってはいたけど、まさか武藤さんの助けをかりるとは。

「僕もまだまだだな」

そう呟きながらフェンスをおり、和美ちゃんに寄っていく。結構きついからもう寝ちゃって、

「……な、なんでいきているの……彼
お。」

「ん？ 凄いね。その麻酔撃ったらソッコーで効くんだけど」

ああ……、たしか彼女、肝臓が悪くて麻酔なれしてたか。でもそれでももって数分だろう。

「たしか……毒を。『カクテル』……」

「それはね。さっきいった人使い荒い上司さんが中和しちゃったみたいだよ」

それをきくとふーっと眠るようにまぶたを閉じた。

僕は少し躊躇いながら、彼女に近寄り和美ちゃんの耳元で囁く。

「君がさっき言ってた通りならナイフかなにかで彼氏をさしただろう。でも毒なんて、しかもあんな遅延性の毒を使う間接的な方法を選んだ。それってまだ君が彼を愛してる証拠じゃないかい？ もしかしたら、彼が異変に気づいて、

病院にいくことをどこかで祈っていた。

「僕はそう思うよ。」

と、言葉の途中で寝てしまったのかすっかりまぶたを閉じ、スーと寝息を立てている。

僕はまいったなと頭をかくと、

「最後のほうの言葉こそ、きいてほしかったんだけど……ん？」

和美ちゃんの目の端から水のように涙がこぼれた。

きいてくれたか……。と僕は苦笑すると、無線機をだした。

「梶原です。今終わりました。……はい。大丈夫です。……はいわかりました。あ、それから犯人からの要求ですが僕の給料上げることです」

そのまま反論を聞かずにぶちつと無線機を切った。

「はー……やれやれ」

僕はフェンスに近寄りそれに背をあづけ、めったに吸わないタバ

コをだして火をつける。

「……僕は正しいことやったんすかねえ」
彼女は彼女の考えるべき世界が、姿あった。それをとめた僕たちは……。

一気に煙を吸うと夕日にむかつてはきだす。

やっとふいてきたビル風に僕のタバコの煙がたなびいて、真っ赤に染まった夕日に消えていった。

第一章 裁かれるもの 六

沈んでいく夕日から目を逸らし、手すりに背中を預けるようにして反対側の空に顔を移す。本当はこのまま床にでもねっころがりたい気分だけど。

少し下に視線をずらして眠ってしまった和美ちゃんをみる。一応はスーツの上着をかぶせてはいるが、なんだか死体を見てるようで……所詮は偽善なんですかねえ」

そんなことを考えつつ、上着を回収して中に入ろうとして背中を手すりから離し、和美ちゃんに歩み――

「――？」

僕が『目の前の屋上で一瞬光るもの』を刹那で目に入ってきて視認した瞬間、僕は屋上にある一番近い冷却ファンへ向かって思いっきり横っ飛びをしていた。

ほとんど反射だ。

次の瞬間に『僕のさっきそこまでいた場所のコンクリートが空気音とともにはじけ』て、

僕がさらにローリングして冷却ファンの影に到達したときにはまたすぐそこにいた場所のコンクリートがはじけとび、

ターンっと音がした。

「くっそ！ マジかよ……！」

さらに遅れてターンっと音が響く。

「なんださっきのは！」

「わかりません！ 明らかに銃声ですがこのビル内ではありません」

「観測班とデータ解析班は現状報告、SIT、SAT、は空自と連携して全てこちらに情報回せ！」

ブリッジビルの地下駐車場二階の全フロア。そこに情報解析課の対策仮設本部がある。やれやれめんどくせえのがやつと一つおわつたと武藤がのたまりながら撤収作業をしようとした矢先の出来事だった。

高く唸るような銃声に梶原の無線からの音。これでまるで温泉ムードだった雰囲気は戦場のそれに一気に逆戻りした。

「宮崎！ 屋上の観測からからの連絡は！」

武藤が各員に指示をだながら叫ぶ。

「いまくる。配備は五チーム。ここを中心に半径三キロはカバーしてる。……狙撃一班状況報告！」

宮崎がそういうと回りの動きが少し鈍る。現況を把握しておきたいというのは誰もが同じで早川含め全員が報告がくるスピー力を注視していた。

「南東一班より本部へ。こちらからではビルの陰になってなにもみえない」

くそつっというて武藤がさらに指示を飛ばす。

「飛ばせるだけのへりを飛ばせ！ 府中から攻撃へりもひっぱってこい！ ほらつとつと動け！」

少し酔ってんじゃないでしょうね、と思いつつ宮崎は武藤をじつとりとした目でみて次の報告を聞く。

「北西二班より本部へ。こちらネガティブ」

「北東三班より本部！ ビルより約四百メートル離れた建築中のビ

ル屋上に狙撃手発見。繰り返す狙撃手発見』

『こちら北四班、同じく』

『こちら南五班、状況は見えない』

つーまいった、と宮崎、武藤も嫌な顔をする。やれやれと不精髭をかきながらパイプ椅子に座りながらさめたコーヒーを啜る。右往左往する課員をみながら、

「屋上狙撃かよ。まいったな……。しかも四百メートルからの狙撃とは随分と。三班、四班！ 狙撃手の相貌を報告」

しばらくの沈黙のあと、

『こちら三班、夕日のかげになり視認不可能。しかしおそらく子供と思われる。ライフルは長距離仕様の可能性』

「子供……？」

武藤が不思議そうに聞き返し、横にたっていた黒ずくめの柿崎が言う。

「仲間、ですね」

「やられたわね。作戦前にあらかたドブさらっておいたとおもったらこんなところに複線とは、ね」

そういいながら武藤の向かいに宮崎が座り、

「どうする？」

「冗談じゃないぞ……」

どう考えてもあれはライフル。しかも狙撃用のだった。

本当にマグレとしかいいようがない。偶然にも和美ちゃんに歩み寄ろうとして、偶然に『敵の狙撃スコープに背中の夕日が反射してその存在に気づいた』のだから。

まったくもって反射でさけたのはいいけど、これじゃふくろのねずみだ。まさしく。

「どうしますかねえ」

そう自嘲気味に考えながら少し不思議に思う。

なぜ敵は、和美ちゃんが僕の手におちたときに狙撃しなかったのか。

それにスコープの反射で敵に気づかれる恐れがあるのが素人でも知っている基礎で、本当に撃とうというときにしかスコープは開かずには普通はそれまで双眼鏡で確認するのが常だ。

敵さんはただの本当に素人？ いや、素人があそこまで精密射撃ができるか。だったら。だったら可能性としては。

そこで僕の無線に強制的に割り込むチャンネル。無線の向こうから聞こえる通話音。僕はおもむろに腰からとって耳当てる。

「どうも。狙撃してる人かな？」

無言。とおもったら、次に少し壊れた笑い方の声が聞こえ、

『変な人だな君は。これから死ぬのかもしれないっていうのに』

……明らかに子供の声。しかも男の子か。

ちらりと和美ちゃんをみて、まったくと呟き、

「最近の子供がテロやるのがはやりなのか？」

そういいながら僕は内ポケットから百円ライターをとりだした。

『違うよ。これはただの余興というか、テロ以前の行動さ。今回はカズミがその先陣をきってくれたけど、ちよつとあまかったね』

ふーん……。母音と子音に伸ばす癖。この子、外国人か。しかも『南』の。

「余興、ね。それならなぜ仲間を助けなかった？」

『それは違う』

少し仲間と言う言葉にかなり反応する相手。

『僕達は手始めにこの平和ボケの国を出身者であるカズミたちが壊そうとした。僕達はそれに乗っただけだ。僕達の、』

そこで僕が横に百円ライターを放り投げる。

と、空中で爆散して弾丸で着火してコンクリートに火の膜を作る。しばらくしてまたターンっという銃声。

『目的はオーストラリアの独立の阻止だよ』

「……君、随分な腕前だな」

ありがとうと流暢な日本語であっちはいつてくるが。会話しながらライターを打ち抜くとは。この距離から離れて五十メートルでもコメ粒にしかみえないもののはずなのに。

『カーペンタリア紛争のきっかけとなった、あの日本の海上自衛隊を巻き込んだトレス海峡事件。あのときから僕達は違う思想をもつてうごいてきた』

何の話がよくわからないけど、そうおもいながら、別ポケットにはいつている棒状の録音機器を無線にあて、チャンネルを本部に繋ぐ。

『梶原か！ 今どうなってやがる？ 敵さんはお前のところから約四百メートルのビルの屋上。子供らしい』

そりゃわかってますって武藤さん。

「動いてきた、ね。僕は逆に動けなくてピンチなんだけど」

そういうと武藤さんは黙る。こういうことには聡いひとだから助かると苦笑しながらまた無線に耳を傾ける。目の前の夕日がいい加減目に焼きつくように痛くなってきた。

『僕達は途中わかれてしまったけれどもいまでも一つ。あっちにもどればまた協力することもできるとおもう。そのまえにこのくだらない余興をそろそろ終わらせないとね』

ふーっと僕が溜息をつく。タバコをさぐって口にくわえたけどライターがなくなったことにきづいてさらに溜息をつく。

なにをいいたいのかよくわからないけど、少しおかしいことがある。

弾丸が届いて、それから銃声がした。

しかし、武藤さんは四百メートル離れた所に、と。

反対側からへりの音が聞こえてくる。

『レアノアはそんなもんじゃない。テロでもない。そろそろ終わらせよう』

第一章 裁かれるもの 七

ヘリの風を切るローター音は、このファンのむこう側、つまり狙撃の相手側のほうから聞徐々にこえてきた。しかしビル上空は完全に封鎖されていたはずなのにどうやってって、

「色々意味不明なこといつて逃げる気かよ……」

そう無線に呟いたけれども返事なし。

しかし、この近距離まで接近しないと気づかないっていうことは。単機？

おそらく消音ヘリか。輸送用、いや、ジェットのほうか。ファンの周りには暑い空気が停滞しているけど、そのヘリの接近でどんどん向こうから冷気が流れ込んでくる。

さすがに消音と入っても数百メートルの範囲に近づかれればその存在感は直ぐに知れる。

いよいよこの近距離になってヘリの出す下降気流、ダウンウォッシュと風きり音がかすかに聞こえ、バタバタとほこりやらなんやらが飛んできた。ファンの影になって見えないが狙撃手ぐらいはいるだろう。

「武藤さん、そっちのSITの狙撃は無理なんですか！」

とりあえず無線に叫んでみるが、……まあ、無理だから今にありやって飛んでるんだろうけど。

『……わかって聞いてくるのならおめーが落として見せるよ』

はいはい……。しかし、なぜここで逃げなんだろう。明らかにすでに僕を殺せるところまで来ていると言っのに、やらない。

理由は？

他の狙撃の仲間を見捨ててまで。

和美ちゃんを回収にきたのは共犯だとしてもこんなあつさり見捨て
るだろうか……。

「いや、違うか」

僕は脇につるしておいた麻醉銃をファンの横から銃身だけをそつ
とだす。

「……………」

何も無い。よし、やっぱりか。

僕は少し顔だして、ヘリを確認。僕のほうから北東にヘリが音も
なく、建設途中のビル屋上に浮いている。ヘリの周りは電線が張り
巡らされていて、さらに警戒してるのか、サイドのスライドドアか
らガトリング装備の男が見える。

「なるほどありや無理だ」

なんとも納得しながら、そろそろ日没という太陽を目の前にして、
僕はファンのかげからでようとしたとき。

ヘリが急に方向転換。少し左に迂回しながら何の躊躇もなく僕の
いる屋上まで一瞬で来た。気がつけばヘリが目の前で対空して、ど
つかの傭兵よろしく黒迷彩仕様の男が備え付けなのか、ガトリング
を僕に標準を定めていた。

完全ホールドアップ。

「……………ていうか海軍ですか」

くだらないことを考えながらヘリの機種確認。

ヘリのダウンウオッシュを髪にうけて翻るワイシャツを気にしな
がらそのヘリの全容を叩きこむ。最新式のジョットヘリ、確かまだ
実用段階に至っていないはずの『南』のイギリス軍が採用しているシ
ーホークというヘリ。

無音の風の中、ヘリは何をするでなくただそこにいるだけで、
僕はまた静かに無線を取り出して、言う。

「ここならどうにかならないすかね。武藤さん」

『めんどくせえからいわねえ。とりあえず投降指示でも言ってみろ』
それだったら別のヘリ部隊でもよこして追いかけてこしてくれ、

とげんなりしたけど一応仕事はしてみようか。というか航空支援が遅延しているのは一帯を封鎖しているから？

それを狙ってか……。

「おい！ そのこのへりの方々！ 今なら投降してくれば司法取引で見逃してあげることができるよー。どうかなー」

……不毛だ。かなり不毛だ。命狙われながら犯人説得なんて意味ないだろうが武藤さん。

しかし艦載機っていうことは東京湾か三浦半島沖辺りに船がいやがるな……。

海自に連絡を入れたいところだけど、確かほとんど南部海域へ出張ってる筈だから、海上保安庁か。期待できねえ。

と、急にへりからワイヤーロープが降りてきて一人の青年がするとSWAT顔負けの身のこなしで屋上に着地。和美ちゃんに近づくと、僕の上着を取り、よくよくみればなんともい로운な武器で武装している、陸戦用スーツをきらめかせながら僕のほうに悠然と歩いてきて、僕目の前で立ち止まり、スーツの上着を差し出した。

「なかなか楽しめたよ。僕達はこれでさようならする」

栗色の白人少年だけど目はゴーグルで隠れて見えない。僕はなんでもなく上着を受け取ると、

「君、『南』の子だね？ もう一度聞くけどなんでこんなことするんだ？ テロをするならここにいる僕たち全員を殺してその和美ちゃんのあとを引き継いで実行するのが定石だろ？」

へりに三……四人。こっちは手持ちの麻醉銃に……、いや、反撃は無理か。狙撃チームに頼るしか……。

狙撃は今狙ってるのか……。それとも僕が障害になって撃てないのか。

栗色の髪の少年は僕の言葉にすこし嫌そうに笑い、

「驚いたね。やっぱりプロ同士はこうじゃなくちゃね。色々質問があるみたいけど、あいにく時間がない」

そういつて左腕の腕時計を確認して、今度はいよいよ去るらしく

僕から離れて和美ちゃんを抱きあげる。

「『彼女達との約束はこれで終わり』だ。いい加減全員で行動しないといけないんでね。あとは説明をうけてくれ」

なんだかわからない台詞を残して彼は和美ちゃんをかかえたまま、ワイヤーのウインチで引き上げられながらそのままヘリに降り、ヘリがいよいよ屋上から離れる。

「狙撃、観測全チーム！ 撃てるやつは撃て！ 撃て撃て撃てっ！」

僕は無線にそう叫ぶが誰からの支援もない。 なんだ？ といういことだ。

僕はそのまま手すりに走りよって去っていくヘリのローターを麻酔銃で狙うが、

「くそ！」

『そこは三班だけが視認できるが反撃される可能性がある、無理だ』武藤さんの声を聞きながら、僕は去って、夕日に照らされ、途中で消えるようにいくジェットヘリを見送る。

「さっきのイギリスの最新式のシーホークですよ。どこかの湾岸に艦載機の船があるはずです」

『わかってるよ。今警察庁と連絡とって早川に探させてるよ』すかつ、といって僕は手すりから離れる。

なんだかおかしい。

あつさりしすぎている。

なぜ僕たちを殺さなかったのか？ 顔を見られたんだったら、いや、違う。彼は説明を受けるとかなんとか。

そうだ。武藤さんの敵は約四百メートルに、それに、

銃弾が先。音が後。

と、一瞬、左足がガクンっと落ちた。

なにがおきたかわからなく、膝をついた左足太ももを見ると、撃たれた銃創があり、血がじんわりとスラックスに滲んで、

「くっそつたれ！」

痛みあまりその場に僕は思いつきり転がりながら仰向けに倒れた。少しでも狙撃を避けるために。

そしてターンつという銃声。

「やっぱり、いたんじゃないか、よ、くそつ……」

計算狂いどころか、全員が騙された。

距離四百からの狙撃じゃ銃声と音はほぼ同時のはずだ。

音が後からくるならば弾丸が音速を超える前提が必要。ならば、最低一キロ以上離れていなければ銃声は遅れて聞こえない。

和美ちゃん自体が複線。ミスリード。

「武藤さん！どこからですか！こっちのフォローは！」

『こちら観測三班、狙撃はここから二キロ以上離れた同程度の位置から発射された模様』

『宮崎よ！もう一機ヘリが高速接近中！早くそこから離れて！』

後ろに伏兵。初歩じゃないか。どうにもならない。この状態で屋上入り口まで行けそうにないし、そもそも『彼が僕たちを見逃したのは僕たちを全員殺すため』だ。起き上がったとたんに撃たれる。

彼はフェイクだった。撃っていたのはもっと後ろの長距離のところからの、

「こいつらね……」

僕の足元の方角にさっきと同じ消音のシーホークが滞空していた。しかし今度は長い黒髪を持った、ワンプピースにキャミソールの私服姿のどこにでもいそうな少女がごつい狙撃銃を僕に狙点をヘリのサイドから定めていた。ていうか、くそ、いつて……。

「あなたが、和美をやったのね？」

第一章 裁かれるもの 八

消音どころか、まったく音がないうへりのおかげで彼女の静かな声ははっきり聞こえる。彼女の声は上ずってもいなく、怒気も孕んでいないただの音の連なりで、綺麗だと思えた。彼女どこか日本人離れしていなく、それでいてその無表情は普通のただの少女にしか見えなかった。

「……そうだよ」

僕はワイシャツの袖を腰のナイフを振り抜き、切り出し、横に転がってる細い鉄骨を視点に太ももに止血帯ささと巻く。

そして、……こんなことだれが進んでやるか、自分の左足の膝に麻酔銃をつけ、――撃った。

「ぐううううっ！ ……つくつそが……」

すこし痛みに悶えてると上から『説明役』の彼女が関心したように、もしくは呆れたかのように声を出す。

「随分と……度胸あるのね。軍隊の方。さてと、しかし――ここまです面白いうにひつかかってくれとやる気も失せるわ。それとも馬鹿なのか阿呆なのか」

どうやら今度は日本人らしい女性の声に激痛を堪えながらなんとか皮肉気にやける。

「ありがと……さん。まさか……『後ろに』……もう一人いるとは思わなくてね」

彼女は夕日に目を移すと、肌理の細かい髪を掻きあげる。長い髪がへりの下降気流に弄ばれ、綺麗な顔に似合い、ますます銃が不釣り合いにみえた。

「えっと、さつさと言っちゃうけど。あ、これちゃんと中央の偉い人に届いてるわよね？ 私達は例のトイス海峡事件で被害者となった海自の遺族の子供たちよ。まあ、馬鹿なあなた達でもそのうち辿りつくでしょうけれど。あとさっきのレアノア、というのは、そうね、まああたしたちの集団の名称みたいなものよ」

彼女が銃を膝までさげる。僕は麻酔が効いてきて麻痺し始めた左足を立て膝にした。

「トレス海峡事件をやむやにした日本政府のせいでわたしたちは残され、そしてあの紛争までに発展した。現在の南の独立は日本が根源に原因があるってわかるでしょ？」

僕は片手について半身を起こす。

「そうだね……。昔の政治家は保身だけ考えてたから。調査も列強から弱腰って見られたくなくてあんな結果になった。でもあそこでの政治的取引がなかったら今頃日本は、」

「戦争になってた？」

「……………」

彼女は少し笑いながら言う。

「なればよかったのよ。何の罪もないものが罪を受け、そして戦争の必要のないところで戦争が起きる。理不尽っていうものが世界を壊すっていうことをまったく知らない無自覚な悪意。当事者がそんな平和ボケてるのなら私達が正してあげる、私達が、和美と私はそう考えて日本にきたの。でもレアノアの中でそう考えていたのはわたしたち二人だけ」

「……………」

ふー……。狙撃チームは全員狙ってるはずだ。無線は………多分大丈夫。

僕はすっかり暗くなってきた空に目を移して、流れている筋雲しつかり見て目を細くして。

片目だけを瞑る。

「だから、彼には無理言って手伝いに来てもらったの。彼は日本と

いう国をどうでもよく思ってるらしいから。もつと言うとレアノアは一つで一纏まりじゃない。それぞれの思想を持って戦争を起こして、必要なところには戦争を潰すっていう感じ。そこらへんにいる過激派とかテロリストだとかとは、違うのね。まあ、もちろん平和的解決を、望んでいる、人もいるけどね」

……ん？　なんだろう。なんか悲しげに似たような……。

「随分な考えをお持ちだな。神様になったつもりかい？」

僕が笑いながら言っただけでポケットに手を入れてなんでもないように出す。

「キリストなんてどこにでもいるわ。あなたにも、私にも。正義は、誰にでもある。判断するのは世界であり、民衆であって、世論の歴史よ。さて、」

そう言っただけで狙撃銃、おそらくVRS10を僕にむける。その重そうな鉄の塊を軽々と持ち上げ、無表情に、

「えっと、そろそろ終わらせましょうか。下の人にも今狙ってる狙撃の方々にも悪いけど、」

「——確かに悪いね」

僕が台詞に割り込んで、左手に握っていたものをへりに向かって無造作に投げる。

彼女は反応は出来ただろう。

でもこの「不意打ち」は予測できないと僕は、そう踏んだ。

「——っ！」

彼女は打ち落とそうとすばやくほぼ反射で反応するが、遅い。スタングレネード。

小型のハンドサイズの発煙閃光手榴弾は空中でピンが抜けると、少しの破裂音と同時、屋上近辺を真昼にした。

僕は『ずっと瞑っていた片目を開けて』、彼女たちがすっかり視界を失っていることを確認して。

「三班！ 四班！ できるなら全チーム全ての弾をヘリに打ち込め！」

そう無線に叫ぶとあっちも予想していたのか、

いくつもの銃弾の風切り音。無線の怒号と弾ける石の音と金属音が光だけ晴れ、まだ煙の残る中、いくつも聞こえて、

「——！ ハリアーだ！ ハリアーが来たぞ全員撤退！ そんなもの置いてけ」

「こちら一班、東京湾方角から戦闘機が来たぞ！」

「交戦中止！ 中止！」

「マッジかよ、きいてねえ……」

戦闘機まで……。バックにはなにかどっかのパトロンがいるな絶対こりゃ……。

SITの無線を聞いて、目の前の煙が晴れると、

「今日は帰れるのかなあ……」

ただの日没後のにごった東京の空だけしかなかった。

第二章 救われるもの

新筑波国際空港搭乗ターミナル。液状化現象で半分沈んでしまった新東京国際空港の代替として作られたもので、ここは国内二番目の国内外の人が行きかうゲートとなっていた。鬼怒川沿い、つくば学園都市沿いともあって外国の観光客が耐えない場所でもある。

その入国審査ゲート九番。今に他のその他大勢の人と同じく日本に入国しようとしている少年がいた。

長身で一七〇センチ後半。しかし顔はまだ幼く、実際の実年齢は一七歳といわれてもそう信じられる者いないだろう。たしかにその大人びた顔立ちには大学生のような雰囲気がある。髪は日本人特有の黒色に日本人の特有の黄色人種。季節にそった半ズボンにＴシャツ、そしてアウトドア帽子にリュックとこれからハイキングにでも行くのかというような出で立ちだが。

対面する入国審査官にはつきりと答えていく。

「Are you the British? Is a hometown Manchester?」

（あなたはイギリス人？ 出身はマンチェスターですか？）

彼の後ろに控えるまだ三十人以上の入国者を上目遣いでみてその二十代女性の審査官は少しため息をつきながら五つの書類にハンコを機械的に押していつて、横のパスポートを確認する。

「Yes. My father was British third generation Japanese American, and I moved to Australia with the family by a relation of father's work at five years

old”

（はい。私の父がイギリスの日系三世で、私が五歳の時に父の仕事の関係でオーストラリアに家族で移住しました。）

少年はまるで軍隊の上官に報告するような言い方で無表情で答える。審査官はその様子をみてふん、つと両眉をあげて笑い、

“Have you come from Richmond with that? A purpose of entry to Japan?”

（それでリッチモンドから来たんですね？ 日本への入国目的は？）

“It’s sightseeing. I have the friend who was studying abroad here and have come to play. I met by a club called rarenion at school”

（観光です。こちらに留学していた友人がいて遊びにきました。学校のレアノアというサークルで知り合ったんです。）

“reunion? Is it French?”

（『集合』？ フランス語ですか？）

少し興味を持った風な審査官に少しはじめて眉顰め、表情らしいものをだした少年はいう。

“No. It’s an ordinary club name”

（いえ。ただのサークル名です。）

そうですか、と審査官が呟き、パスポートにフライング気味に入国許可のハンコをおす。

“The length of stay?”

（滞在期間は？）

少年はにつこりしてリュックを少ししよいなおして答える。

“Three weeks”

（三週間です。）

審査官は少年の笑顔に答えるように笑顔になりパスポートをわたしながら言う。

「I see . A good vacation . Mr Tomoyuki . Please have the next person !」

（わかりました。よい休暇を。智之さん。次の人どうぞ！）

「ありがとう」

少したただしい日本語で礼をいうと、パスポートをもって、さつそくとばかりに荷物受け取り口にむかう少年。そのあとをわき目でみて、女性審査官はほくそえみながら次の外国人の対応をしようとパソコンの画面を変えようとしていると、

「ん？」

女性審査官は疑問の声を上げる。目の前のアングロ系の外人を無視してパソコンの操作をする。先ほどの少年、智之という日系イギリス人の個人社会保障番号が通らない。なんとIDを通して「不許可」の赤文字があがる。

……まさか。

横の電話をとると、その場からはなれまだ背中が見える少年のあとを早歩きで追いながら、

「こちら九番ゲートで問題発生。イギリスのオーストからきた一七歳少年が偽造パスポートで入国の疑いあります。警備員を四人まわしてください」

そう早口で言うつと、もう目の前の少年の背中に叫ぶ。

「Stop! You stop immediately, and please raise your both hands !」

（止まりなさい！ 君、すぐに止まって、両手を上げて！）

審査官は息を切らせながら追いついて、警棒をだす。少年、智之は言われたとおりにその場でピタリととまり、静かに両手をあげる。

周りの観光客、搭乗客はなにごとかと周りを円状に十メートル以上離れて見ては、暫くしてやってきた警備員に押されている。

智之の後ろに女性審査官一人、左右にこつい警備員が先端が電気シヨックを与える警防を持ったまま控え、正面に一人。

それを両手を上げながらしずかに一人一人確認していくように首をめぐらせ、そして最後に女性審査官に落ち着く。

「なにか問題でもありましたか？」

流暢な日本語。その質問に一瞬審査官は戸惑ったが、

「あなたに不法入国の疑いがあります。近年はオーストからの不法入国とテロがありますのでオーストからきたあなたにはこちらのオフィスに来ていただき重要な質問を受けていただきます」

智之の周囲の警備員が静かに近寄る。

「きちんと丁寧な対応は約束します。ですから抵抗はしないでく、」

「そりゃ無理だ」

そう智之がいた途端、女性審査官の右の警備員が二メートルほどふっとんでいた。智之のその突然の行動に全員がまだ残身している格好をみる。

右手を腰に、左手を肘をはって拳を顔につけて、両足は大きく開いている。そして今度は左の警備員に一足飛びで襲い掛かる。

まさに疾風。反応する時間がまるでない。

警備員はかろうじて警棒を振り下ろすが右手右足をだす体捌きでかわし、その警棒をもった手首を少しひねあげ、警棒を奪い、腕を取って自分の頭を一蹴させて後ろ向きになり反動で投げる。一回転した警備員に空中でつきをくらたわせたあとに、今度は正面の警備員には一瞬でけりがついた。

つかみ掛かると、明らかに柔道の天中落として極めた。

そして女性審査官に向き直る。その時間まさに二十秒となかった。

呆然としている目の前の女性に智之は言う。

「悪いですね。捕まるわけにはいかないのです」

「あ、あなたなんなの？　なんで……」

ん？　と智之が首を傾げて、ああ、納得したようにいった。

「最初のは小林拳、次に合気、そして次に柔道ですよ。あなた達が警備のプロなら、僕は格闘のプロフェッショナルです」

随分と見当違いな答えで、それだけいうと智之はしずかに歩いて縦断爆撃された後のように静まり返ったターミナルをリュックを揺すりながら走り去って人ごみ紛れていった。

「……………」

あとにはまだ入国手続きを済ませていないいらだった外来人と沈黙と疑問符をいくつもつけた野次馬と女性審査官、そして一瞬でのされた三人の警備員だけが残された。

「ありやなんのカンフーアクションだ？」

さらに見当はずれな感想を野次馬の一人が言う。

「梶原君は？」

白衣を着て、そしてデスクチェアにふんぞり返る、女性が言う。

連日の激務と苦情処理で徹夜しているということが分かった。

「宮崎よう。俺が知るわけねえだろう。それよりもその山のような報告書かたせ」

そう言つてそのオフィスの長、武藤がのたまる。

宮崎はふーんと天井を見ながら言つて、

「大事にはならなきやいいけどねえ」

そういつてかんでいたフーセンガムを膨らます。

第二章 救われるもの 二

窓の外はまだまだ日中のクソ暑い熱気満ちていて、そしてうざいほどの数のセミが病院の木に張り付いて大合唱しては僕のイライラ感を増させるばかりだ。今年の夏は例年より小笠原などの気団が活発で猛暑だとかニュースでいってけれども冷房きかせりやそんなものも意味がない。

「と、このように人類は地球を破壊してるわけですね……」

暇なんでニュースをみながらそんなくだらないことを考えながら独白してベッドサイドにおいてあった新聞を広げる。

三日前のビリッジビルの騒動がまだ国際関係の間で尾を引きづつてるのが一瞬でわかる。

連絡手段を一切遮断された米軍側の糾弾。

国内にオーストの手引きがいたのではないかと言う疑惑。

容易に東京都上空をA V - 8 M、ハリアー戦闘機を侵犯させた危機管理の甘さに対する国民と与党から政府と国防総省への抗議。

犯人を追い詰めておきながら完全に取り逃がした航空自衛隊対テロ対策部隊作戦情報四課への非難やらの議論。

「……やっぱり『レアノア』については一切出さず、触れず、か」
犯人たち、おそらく子供たちのいつていたレアノアと言う言葉。
組織名のようなものとあの少女がいつていたからには違いなだろうが、どうにもひっかかる。

レアノアは一つであって一丸じゃない。

それでは中には「彼女達のようなテロ行為をしないもの」もいる

のか、いや、いるんだろう。事実彼女はいったんだから。穏健派もいると。

それじゃあ、統制は誰がとってる？ まさか構成員全員が自由に行動をとってそれで、まとまっていると？

……まあわからない。考えてもな。

ふと新聞の日付を見る。

二〇〇七年八月一五日。

「もうあれから二年か」

トレス海峡のことがあつてからもう、

そこでいきなり今時めずらしいスライド式が勢いよく、バーンッ

！と開いた。

「おう！ 暇だから見舞いに来てやったぜー！」

……。

扉入り口にはスーツを着た男が立っていた。左手になんかの見舞い品くさい饅頭だかなんだか知らない物を持って、なぜかニコニコしている。

「お前なんでここにいの？」

入って来た男、警察庁情報局情報解析課で南関連の事件で忙しいはずの高木慶一。でもって僕の同期で、警察庁のキャリアから外れて自衛隊に下った僕を未だにかまい続けているヤツだが。

「随分とご挨拶だなあ。こっちはやっと仕事がだいた片付いてこうやってきたってーのによ」

なんかよくわからないことをいいながらベッドの横にある椅子にどっこいしょといって座る。

「はい、うちのボスからのお土産、故郷の三重の赤福とかいうやつらしいぞ。食うか？」

「……いや、いい、っていうか色々つつこみてーんだが」

はいはい、といって包みをサイドテーブルにおいて首を回す。

「つまり順番に話せていうわけね？」

「そうだったの、ていうかそういうふうに引っ張るのは昔からか

わんねえなあ」

僕が少し笑う。実質こいつと会うのはかなり久しぶりだったりする。高木は右腕ぐるぐる回しながら意外そうな顔をして僕を見る。

「そうか？ まあ、そうだな。例のトレス海峡事件以来だからなあ。ま、今回きたのもうちのボスから命令半分だからな」

「ボス、って佐々木真奈さんから？ なんで？」

そういうとーん、と考え込むようにして今度は左腕を回しながら、

「今回の功績は梶原君のおかげ、とかいってたからご褒美に情報漏洩して来いってさ」

「なんだそりゃ……」

もつよくわからん、つーか真奈さん、局長なのに情報漏洩とか簡単に言うかなあ……。

「単刀直入。例のお前らがいった『レアノア』。その一人、捕まえたぞ」

……………。

「はっ？」

なに言っただこいつは。事実この前逃げられたろうが。

「だから説明するって言っただろうが。一番割り食ったのはお前だから俺がこうやって来てんだろ」

そこまでなにやらやっていたストレッチをやめて真剣な顔をして僕に向き直る。

「おい、イギリス海軍ニューギニア分隊が伝達してるぞ」

「米軍の三日づけの公式手続きはどうした！ 今将校がきちまってるぞ！ おい」

「このハッキングはペンタゴンか？ いや、イタリアの内務省くさいな。国際間で腹の探りあいかな」

「ソロモン諸島のISAFにもぐりこんだカルス3からの報告書どこいったー？」

「……いやー。」

俺はそのカオス的なオフィスの状況しげしげと見ながらパッケのジューズをズズツとつ嘍って、

「暇だなあ」

そう呟く。

例の関東広域テロ、それに港区のビルのテロをあわせても忙殺的な忙しさだといっても全部俺の畑違いだから俺は俺で。

「おいー、少しは仕事しろよ」

そういつて向かいのデスクにいる同僚の御崎が高速ブラインドタツチしながらいつてきた。

「してるっつーの。南の通信網に編み張って例のテロ屋の尻尾つかまえようとしてんだよ。これでも二徹してんだ文句言うな」

「俺は三徹だボケ」

例のテログループの一味は艦船は所有してただろうが小笠原沖で艦船を自ら爆破している。おそらく潜水艦まで所有していただろうってというのが上の見解だけでも。

やっぱり暇だ。こんなのらりくらりした話が出来るうちは暇なんだろう。なんて考え、今度は栄養ドリンクニダース買って来ようと考えながらパッケジューズをずるずる眠い頭で嘍っていると、

「おい！ 全員監視カメラ見る！ 一階ホール！」

同僚の怒声で一発で目が覚めた。全員が作業中止、パソコンに送られてくるファイルを開いて、

「なんだこりゃ……」

一階には警備員がかなりの数が転がっていた。おそらく一階常駐の警備員四二人全員……か？

画面をかえて、二階、レストハウス、トイレ、連絡通路。

「敵さんはなに考えてんだろうな、全員四番見ろ！」

俺が発見して全員が画像を回す。

五階通路をTシャツ、半ズボンリュックを背負った背の高い子供が、人質にとったのか警備員を前にして黙々進んでいる。

第二章 救われるもの 三

このビルは総務省との合同で使用されている官庁で、半棟が警察庁が使っているが。

「まずいな、武器保管庫は各階にあるな！」

俺が叫ぶと最近の新入りがあたふた（本当にしてるんだから少しわらっちゃうが）しながらパソコンの操作をして、

「あ、は、はい、五階ごとの西隅の資料保管庫と名前は変えられますがその部屋に。しかし各局長の指示と鍵が、」

「アホかお前は！」

イライラして俺が叫ぶ。

八階廊下でおそらく刑事局のヤツラだろう、そいつらをいとも簡単にあしらってなぎ倒す少年。武器はなにか使っているようだが、まったく見えない早すぎる。

「全員殺されるぞ」

これから来る事実そのまま言つとオフィスがシンとなる。それで改めて見渡すが課員は二十三名、事件の翌日で日中ともあって警察庁のほぼ全員が出払っている状況。

だから、だからきたのかこいつは。

「おい、それで？ どうするよ？」

向かいのデスクでなんの緊張のかけらもクズもないような雰囲気ですごくヒースする御崎をちらりと見て、

「まず、相手の得物確認。御崎そいつ何使ってるかわかるか？」

めんどくさそーに、というかこいつは本当に緊張感っつーもんがねえな、監視カメラの映像をループして、

「おそらく、いや、ほぼ、ナイフ」

「正解」

ビデオを見る限りじゃ、様々な体術をつかって相手をあしらって見えるが、中、長距離になると走って、腰や首、袖に手を回す仕草をときおり見せる。ということは、

「いいか、こいつは確かに体術には長けてはいるが、そんなの警察学校の格闘技教導程度だ」

それって何かのフォローか？ という声が聞こえてくるがとりあえず無視。体術レベルでのかんりの上をいくのに。

「これいつはそれを補助程度にしかつかっていない。格闘技にはそれぞれ弱点っていうもんがあるが、それをいろんな格闘技扱って相互に補っている。だからこいつは格闘専門じゃない」

「でもよー」

また眠そうな横槍の声が入る。御崎はまだループしている動画を見ている。

「格闘技っていうのはその弱点を補うワザもあるから格闘の技なんだろう？ こいつはなんでもんなの使ってるわけ？」

なんだかもっともなことをいわれたので少し拍子抜けっぽい顔をしていると睨んでくるので部下共に顔を背けている。

「何かの理由があるんだろうよ。とにかくこいつはナイフから格闘に入った、それで十分」

オフィスは縦に長く、横に短い長方形形で部屋に仕切られ、居残り組みの俺たちは中央の開放演算室にいる。縦に机が十五に横に八とそれでもでかいが。

「南の傍受組み、A、Bチームは監視庁もろもろ敵さんの腹探れ。

Cはこのまま監視。木村は組みは監視庁、自衛隊に即連絡、つってもつかえないだろうからICPの衛星中継でクラックしろ。あとは全員俺とドンパチだ」

アイサー、アイアイ、わかりました、とかいいながらさっさと動くところはまあ、やはりあっちもこっちもプロってことか。

「接近戦になったら先頭は御崎と俺が出る。あとは全員ひっこめ」

そついうとげんなりしたように、というか本当に干物のように御崎がえー、といって、ポケットからタバコを取り出し口にくわえながら立ち上がる。

「わかりましたよ課長さん。でも俺はやらねえけど。ほらさつといくぞ野郎共」

そついうと周りをひきつれて出口に向かう課長補佐様。
その時。

ドアが、ノックされた。

全員がその場で立ち止まる。ノーパソの配線の替えをやったやつも、オゾン式の三十のラビリの無線機をもったまま固まるヤツも。

全員が固まった。

俺が目だけを動かして出口付近にいるやつをハンドサインで退かす。

「だれかあれからあいつの動向を見ていたやつは？」

誰も答えない。横の御崎を見ると肩をすくめてやれやれと不精ひげをさわりながら気取った風にタバコをふかしてるだけ。

「誰もいないか？」

ドアのノックがまたする。

最短距離でもこの二十五階までは五十分はかかるとうのに。

「壁でもすけてとおりぬけられるんじゃないの？」

気の抜ける御崎の台詞に、いい加減スプリンクラーでもまわって水でもふつてくんねえかなあなんて考えてると、

「失礼しまーす」

まるでどつかのガキが職員室に入るときにいうような適当な声かしてオフィスのスモークガラスのスライド式扉が開く。

Tシャツに半ズボン、サンダルに首に引っ掛けたアウトドア帽子。後ろのリュックはでかいようで軽そうに見える。

そして長身の、少年。

少年は固まっている俺たちをきよる左右みながら出口から七メートル三十四センチほど進んだところでピタリと仁王立ちでとまり、

「えーと、この前うちの友達集団の彩夏がお世話になった、梶原怜次さん？　のお友達の高木慶一情報解析課課長さんは誰ですか？」

ガキ特有のなっていない、社会にでたことねえような、敵な言い方で聞いてきた。俺は少し少年のしたからうえまで見て、袖は無理、リュックか腰に仕込み、と踏んでからいう。

「俺だが。こんなところまでなにいつてんだ？　友達集団って何の話だ？」

そして俺のほうに目をむけ、その長身をゆるるように腕を折って頭を掻く。目線が同じ位置なのでなんだが不思議気分。

「ああ、そうでしたね。こちらではレアノアっていつてるんでしょうけど。その和美、彩夏、クリストがお世話になったはずで」

……クリスト？　前の二人の名前は聞いたことはあるけど。報告にあったフェイクの男のほうか？

「レアノア、ね。それで？　ここに來た理由はなんだ？　俺とやり合うためか？」

少年はそれを聞いて不思議そうに俺の靴をみてから肩をみて、そして上げていた腕を降ろす。

「いや。それもおもしろうそうだけどやめておきます。あなた、外見に似合わずかなりお強そうなので。横のタバコの方も」

御崎がどうも、と相変わらず気の抜けたコーラみたいな返事を返す。

「用件は簡単ですよ。俺はあいつらを止めにきました。あんまりこ

ういうのは好きじゃないんですよ」

じゃあなんで警備員全員ボコってんだ……、という空気がオフィス全体を包む。

「それで彩夏の狙撃のせいで動けなくなった梶原さんの代わりに俺を使ってくれませんか？ ご迷惑をかけたし。一緒に行動したほうがいいですし」

空気が再びコンクリート化する。

「ちよつとまで。お前だつてレアノアのメンバーなんだろう？」

「まあそうですが、少し違います。あいつらのやってることとは大違いですよ。それに俺は彩夏を迎えに来ただけです」

ふーんと俺が韜晦する。

「それで梶原の代わりに？」

「はい」

「マジで？」

「なんですか『マジで』って？」

さらにオフィスの空気が固まる。

少年はにっこりわらって、

「冗談です」

「つーわけで、あいつをお前の治療中の後釜にすることになった」

……。

「なに言ってるの？」

「局長命令だ」

そういつてゴキゴキで首を回す高木。

「ついでに武藤さんからもオッケーでたし。上には内緒でライオン飼うことになったって感じだ」

僕はひたすら痛くなる頭を振りながら窓の外をみて現実逃避をしようとした。

第二章 救われるもの 四

僕が日本入りしたのは例の彩夏たちがテロなんていうことをやった八月十三日の翌日だった。

僕は特別特区指定校であるリッチモンド州立大学付属高校にいたのがさいわいで、スキップによって大学の研究生までいつていたのも助けになった。一般渡航者が禁止されていた『北』には容易にパスポートが教授の許可で取れ、翌日にはエアバス1900便で日本に向かうことができた。

僕のはずは、彩夏をとめるためだった。
そして、

この二年間。

日本のどこにいてもかもしれない彩夏をさがすために、邦人としていくことができなかった僕の決心を最終的に日本でのテロという形で彩夏たちは居場所を教えてくれた。

僕は彼女が好きだったのだろうか。

好きなのだろうか。

彩夏は僕が好きだったのだろうか。

そんな漠然とした、疑問と不安と、そしてなんとも言えない時間

の進むこの遅い解決方法というものにいらだっていた。

だから僕は自分で行動した。

いつまでも彼女と僕の距離は遠く遠く。いつまでも彼女の気持ちはきつとあの海の水平線のように平らで、それでいて遠いのだろうと思う。

彼女に会って言いたかった。そして

僕は何より、彼女『達』を止めたかった、そう思う。

『十四日午後七時頃に新筑波国際空港国際第一ターミナルで起きたオーストラリア人の日本への不法入国事件について、事件の捜査を担当した関東入国審査管理局は警視庁刑事局特捜部への応援を仰ぎ、関連会社のANAなどから監視カメラ等の映像記録や目撃者への箝口令の義務を命じました。この対処に警察庁手嶋警察庁長官は「オーストラリアが関わる本件は国内外に紛争や内乱をおよばしかねない。今回の対処はそれを抑止するため行動であり、他機関の捜査妨害、隠蔽では決してない」と記者会見で弁明しおり、国家公安委員会や国防総省、またイギリス外務省や国連安全保障理事の十二国からも疑問や非難の声が上がっています。特にイギリス、オーストラリアキャンベラ外務省支局は昨日十七日に日本政府に遺憾の意を示しており、今後の十二国会議での主軸となる――』

「なんか矛盾してますねこのニュース」

僕がぼんやりとテレビの感想を漏らすと、

「みんなで猿芸やってんだからあたりめーだろが。全部お前の考え

無しの行動だこれは。少し反省しろ」

と横のに座っている高木さんが眠そうに言いながらソファにだまりと座る。僕はまだ続けている二ユースをみながら、

「すいません」

そう、高木さんに言うと、なぜかは？　と言った感じで僕の顔を見つめてきて苦しそうな、嫌なといった表情に落ち着いた。

……なにか変なことだったかな。

「お前みてえなバカ正直なガキは嫌いだ。それならどうしてもっと普通に行動できねえんだろうな」

よくわからないけど警察庁のこと怒ってるんだろうか。それとも僕の入国の隠蔽にいろいろ走り回ることになったのを攻めているのか。

「まあまあ」

高木さんの横のソファに座っている梶原さんがのんびりと穏やかに言う。

「こっちの痛手は駆けずり回った各所に僕の足ぐらいだから、事件の関係者がこっちに来てくれただけでもお釣りはくるだろ」

確かに今日退院したばかりの梶原さんの左足はまだ完全といえな
いが松葉杖なら問題なく歩けるぐらいまで回復していた。この年で
ここまで回復が早いのは軍人並だなあと考えながら梶原さんに言う。

「昔から止む終えない、切り抜けられない状況になったら実力行使
はしなければならぬと教わってきたので。あまり彩夏たちのよう
にデリケートにできないんです」

ふーんと高木さんがいつて横においてあったコーヒーの缶を開ける。

「『教えられて』ね。それもろもろ、俺達が聞きたいんだが。こ
うやって梶原が退院するまでお前の言う通り待ったんだ。警備員の
事後処理のお釣り、きっちり返せよ」

そういつてコーヒーの缶を半分くらいからにする高木さん。僕は

ニユースが都内の殺人事件に変わったのを見ながら、怒ってるのはやつぱり前者か、と思つて回りを見る。

マジックミラーが対面に、その周りは普通の休憩室のように観葉植物まである。

取調室、らしいがなんだかここまでカジュアルなものをはじめてみた。あつちに何人、刑事さんがいようと関係ないけれど、僕も喋らなくちゃ話が進まないと思う。そのためにここに来たんだし。

十五日に高木さん達と会い、一応保留のまま、今日の梶原さんの退院の十八日まで伸ばしてきた感じだった。今日までは大まかなことだけで、なぜそこまで梶原にこだわる、とまで疑問をもたれたけど。

「それじゃあ、お話しますか」

そういつて僕はニユースから目を離す。

「始まりは、そうですね。二〇〇五年のトレス海峡事件からです」

第二章 救われるもの 五

「僕、いえ、僕たちはトレス海峡事件の遺族だということはもう知っていますね？」

僕が横の二人を見つつ、確認するかのように話しかける。

高木さんはソファから立ち上がり、自販機の横においてある吸殻たてのところでタバコを出す。そんなのを横目でみつつ、梶原さんは、悪いね、と言った感じで頷いてくれた。そして僕は続ける。

「僕たち……僕たちはあの事件から当事者であるイギリス軍をとても憎みました。一五歳ながらも当時の国際関係は自衛隊の父親をもつ僕たちにはわかりすぎるほどだったからです」

僕は正面をむいてタバコに火をつけてこちらに背中をむけながら吸う高木さんを見る。

「僕たちは僕たちなりに、周りの大人に訴えました。なぜこんなことが起きるのかと。友達であり、同じく父さんをなくした四人の、僕らの母さんも含めますが、当然全員在日としてイギリスに抗議したんです。本当にいろいろありました語りつくせないほど。しかし」

今度は横の巨大なマジックミラーをみてピタッとタバコの手を止める高木さんから視界をはずす。

「日本政府とイギリス政府が、公式的な場での陳謝と遺族の慰霊金、特別対応処置、イギリスの経済的基本方針の国連の棄却と経済制裁『程度』で終わったことが、僕たち、または周りの日本人に対しても問題だったし、さらに反感を募らせる結果となったんです」

少し言葉をとめて様子を探る。梶原さんを見ると随分と真剣な顔

で見つめ返してきて、そして高木さんは不自然にタバコをもったままそのばで固まっている、ように見える。マジックミラーのほうをじっと今度は見つめ、

「少し話が前後しますが、先ほどからいつている『僕たち』というのは先の現地で仲良くなった日本人三人、オーストラリア人四人のことです」

話題が転換したためか少し雰囲気緩和が明らかになる。高木さんはぎこちない動作でタバコを吸う。

「僕に、菅原彩夏、長谷川和美、藤沢祐樹、シルフィア・イベツトソン、ジェイニー・デビス、クリアル・ニケラ、クリストファ・シアル、この八人で現地ではいろいろあって、僕ら日本人が派遣されてから二年間、一三歳の頃から仲がよくて集まっては遊んでいました。その事件が起こるまでは」

ちらりと角のスピーカーを見るがなんの反応もない。高木さんは立ちっぱなしで、二本目のタバコをだして下にむける、なれた仕草でタバコに火をつけ、梶原さんはなにか思いふけることでもあるのだろうか、前を注視していた。

「話を戻します。僕らも独自にいろいろ情報を集めたり、抗議をしたり。しかし所詮子供です、そんなものには限界があり、実際に表立って動いたのは大人たち。でもそれがアダとなったのか……、祐樹の母親が交通事故で亡くなったんです。日英合意から国際被害者の団体の代表として動いていた人です」

少し遠回りに話すぎたかと思いつながら、

「それで動きが激化、した、とまではいかずに逆にみんな沈黙化していった。自分も『暗殺』されるのではないかと」

「それは」

急に高木さんが背中を向けたまま語りかけてきた。

「それは本当に暗殺だったのか？」

僕は少し顔を引いて、間を持って、

「はい」

それだけ言つと、そうか、と高木さんは言う。僕は内心首をかしげながら話を続ける。

「レオノアのことを話しますが、その事件で僕たちは悩みました。なにより、仲間の親が死んだことで全員疲れたんです。これだけいろいろやつても巨大な、まるで空のような組織、国というものは適わないのかと。その頃からです、初めにクリストファー、クリストが僕らはレオノアだと言い出したことは。語源はなんでもない、和美が以前英語の集合の意味『reunion』を間違つてローマ字読みしたこと、フランス系の彼がフランス語での『renoir e』の読みを前者の最初をと後者の最初をくつつけただけ。「レオニオン」と「レノアル」をくつつけて、外人の僕らと君たちは一緒だということを彼なりに表したかったらしいです」

僕は静かに立ち上がり、マジックミラーの前まで歩き出す。横にいる高木さんは相変わらずタバコを吸っているだけで僕がくると目をそらした。

「誰もが最初はコードネームのように聞こえてしまふのですが、その後本当に組織名として使われてしまう。最初は本当に友達同士での呼び名だったのですが。レオノアがそんな感じに組織化してしまったのは僕の彼女の彩夏が海洋調査で徹底的証拠を見つけてしまったことからです」

「なんだって？」

「なに？」

一つのバスとテノールがばっちりのタイミングで合う。何かやり思い当たることがあるのか。

高木さんと梶原さんはなんだか気まずそうに顔を見合わせて咳払いをしてバスの高木さんが言う。

「お前、他のメンバーと付き合っていたのか？」

全然違うし……。

「それは違いますよ」

僕は苦笑しながら高木さんを見て言う。

「こういうことはあんまりいたくないですが。彩夏と付き合いだしたのは事件前のことです」

ふーん……と高木さんが韜晦して、梶原さんは苦笑しながら続けて、と手で示した。

「えっと、レアノアの組織化の経緯ですが、大まかに言います。イギリスの事件で沈没した巡洋艦の一つ、『シェフィールド』から当時同じイギリス海軍が使っていた三五口径の榴弾跡が見つかったんです。シェフィールドは後衛の補給艦で、当時はなぜ沈んだのか不思議がられていましたが、この矛盾は誰が見ても明らか、です」

「つまり、あの事件はイギリスの自作自演、だと？」

梶原さんが言う。なんだか目を細め、悲しそうにしている。

「そうです。あれは実はオーストラリア軍に見せかけた自作自演にしようとしたもの、ですがしつての通り失敗。僕たちは国のくだらない思惑に巻き込まれたわけです。この事実を知った、一番反英心が強かった、クリストはイギリス海軍に潜入するため、名前を変え入隊、シルフィーと僕を除く全員がいつてしまいました。もちろん学校にかよいながらですが。レアノアのバックについてるのはつまり、イギリス軍ですよ」

高木さんが理解できないという感じで眉を顰め、梶原さんが、

「オーストの独立を阻止する小さな組織のバックにイギリスが？」

僕は頷いて、

「復讐、のためでしょうね。利害が一致するとスパイのように従つてると見せかけていずれか裏切るつもりなんでしょう」

少しため息をつく。

「もちろん、そんな程度で今回のこの事件までできませんよ。当時、二〇〇六年五月二十日、海洋調査で自作自演だと発覚したが当然保身のために誰もそれを口外せずに闇に葬った。それに対して現地に事故調査員として入っていた、数人の自衛隊員によって何人かのイギリス将校が告発されて秘密裏に処理された。が、数日でその自衛隊員らは日本政府の要請で強制的に撤収されました」

固まっている二人を見て、

「今回の事件はレアノアは道具として使われたわけです。意図したのはバックのイギリスの『復讐』。高木さんと梶原さんもその自衛隊事故調査員のメンバーですね？」

「で、どう思う？」

目の前には長身の青年が長々とまるで自白するように話をしている。話しかけた女性、宮崎は目の前で記録をパソコンにとっている事務官三人をみる。

「さあ。どうだろうな。音声からは嘘だとは判定でてないが、そんなの訓練次第でどうにでもなるだろうし」

横の若いような、大学生のような男性、武藤はそう返す。

「そうはいつでも少し興味深いわね。内部のしかも上層しか知らないことをいつてくるのはこっちにいるだろう、上の私達に対しての味方だという証明のつもりかしら」

そついう、武藤の隣りにパイプ椅子に座っている佐々木情報局局長。彼女らの目の前には取調室の前景が見える、つまりマジックミラーの向こう側、にいるということ。

佐々木の横にスーツを着た随分と背筋をピンとした四十代の男性が威厳をこめた声で言う。

「まあ、そうだな。……どこかに泳がせるにもこちらで捜査員として縛り付けるのがいいだろう。反乱分子でもないようだしな」

「吉田一佐」

佐々木がとがめるように男性の名前を言う。男性は意外そうな顔して佐々木を見て、

「問題発言、っていうものですよ。仮にも海自の上層ならそういう

考えをお持ちにならないほうがいいのでは」

そう言われ、吉田は懔然となってまだ話を続ける向こうの智之と
いう少年を見る。

後は誰も発言しない。六台のパソコンがつくる淡い陰影とタイプ
ングの音にさらされて全員が静かに話を聴く。

第二章 救われるもの 六

幅広い取調室にいきなり甲高い電子音が鳴った。佐々木真奈は自然な動作で胸内からケータイを出して話す。

「私だけど。……ええ、……うんわかったわ。そうじゃないけれど、とりあえず外に出る。……あんまり言々と残業増やすわよ」

妙な言葉尻でケータイを切ると、さっそく横の武藤が話しかけてきた。

「誰ですか？ 緊急用の電話使うなんて」

「うちの部下。どうやら話を聞いていた内務省が情報を求めているらしい」

あー……、と武藤が額に手を置く。

「くそあのハイエナが。どうせ調査室の連中だろう。私が一つ蘿蔔議員に言って黙らせてやる」

少し息巻いた吉田を佐々木は手で遮り、

「大丈夫です。こちらでうまくやりますので無駄に動かないでください」

そついうと草々に退室していった。

部屋の外の廊下には部下の御崎が、書類を小脇に抱えて両手をポケットに入れ立っていた。

身長はかなり高い一八〇以上はある身長に鋭い目、顔は落ち窪んでいるが丹精で眼鏡と髭が相まっていかにもやり手の男に見える。俗っぽく言えばダンディなおじ様ってところだろう。

「お疲れ様です局長」

顔はほぼ無表情だが通る声で挨拶をしてくる。

「ええ、それでどこまで漏れた？」

どこまで内閣府に漏れたか。

「一応オーストの子供がここにいるってとこまでですね。話は途中からこつちが予め作っておいたものと差し替えておきました」

……あの兄弟を探しにきたとかいう出任せテープか。

「それで——『アレ』は本物、ですか？」

「本物つてもんじゃないわ、『当事者』よ。参ったことにこんな爆弾うちで扱うことになるとはね」

「話はどこまで？」

「例の事件でイギリスがオーストの攻撃に見せかけ、自分の艦船を自沈させて自作自演の戦争起こして潰そうとしたこと。レアノアというテロ組織はイギリス軍所属であるということ」

そこまで話して御崎が少し目を開く。ポケットから手を出して顎に持っていく。

「と、いうことは。レアノアっていうのはイギリスとは関係がない？」

「おそらく、ね。推測だけあの事件の収束に一番買ったのは日本よ。オーストのイギリスの一部が復讐目的でそろそろ動いても不思議じゃない。それにイギリスに復讐心を持った孤児で成り立っているレアノアがそのイギリスに潜入、今回のテロ行為の任務に自ら志願し——体のいいところで裏切るつもりでしょうね。ただ潜入するのはレアノアだけじゃなくて別の特殊部隊もいるでしょう」

「複雑ですね。大英連邦は何を考えているんでしょうかね」

簡潔に感想を言う御崎。

「そうかしら？　ぐちゃぐちゃしてて気持ちがいまいけど」

「で、レアノアの目的は、オーストの独立阻止、と。そこが分からないんですが。オーストが独立すればそのあいっらだって都合がいいのでは」

「あれは『言わされた演技』だったのか、それとも私たちを煙に巻くためか、どちらにせよレアノアっていう組織内部が個別で動くという点からよくわからない。ヘリから来た少年は『手伝いに来た』とも言ってたらしいから今回の狙撃をした子とレアノア全体とは

目的が違うのかも」

佐々木はポニーテイルにしてある長い髪のに手で触ると、

「どちらにせよ、あれはオーストラリア独立を支持する組織よ。現に今智之君の話では近くに日本に滞在してる上役のイギリス将校を殺る」

「つまり、レアノアのほうにはイギリスの『主要メンバーの二人を殺すこと』が伝えられていなく、そして彩夏達は放置した日本に復讐という双方の思い違いがあった、と言うことです。レアノア側のクリストがこんな事件を起こしたことはつまりそういうことです」

僕がマジックミラーを背に高木さんと梶原さんに言うが、あいかわらずに高木さんはどこをみているのかぼんやりとした目でタバコをすいながらミラーを見ていた。梶原さんは真剣な顔で僕を見つめ返し、

「それは少し違うな」

いつもの優しい口調で言ってくる。僕がどういいうことかと眉を顰めると、

「元々、俺らは同じ警視庁で、そんなときにはまだ自衛隊組みじやなかった梶原も同じだったんだよ。警察官」

そついうとマジックミラーに向かって向こうの誰にか、ハンドサインを出して続ける。

どうやら「違う」の論点が事故調査のことを言っているらしかった。

「出向、て言えば聞こえはいいが、事件当時の南緯五度海域は第三次大戦でもおきそうなぐらいの緊張だね。監視役と何か不祥事があればとっ捕まえて来いって尻叩かれて行ったのが俺と梶原と現在の情報局の局長さんだ」

ふん、と僕がため息をついて梶原さんの横に座ると、高木さんがふーっと、やはりぼんやりとした感じでタバコを吸い終わって、横

の自販機に何気なしに近づいて小銭を突っ込み、缶コーヒーを三本取り出し口から出して、

「ほれ」

となんのモーションなく投げてきた。

なんでもない動作だったが、取るのを一瞬躊躇った。

そのせいでボスツと変な音を立てて僕の膝でバウンドした缶はそのまま床にごろごろと転がる。

「何してんだ？　ちゃんと取れよ」

そういつて高木さんは拾って渡してくれたけど、横の梶原さんも何かに驚き気付いた様子で、

しまったな……。

そう自分の内だけで舌打ちをしといた。

「いえ、遠慮しておきます。今『歯の治療中』でして」

そういつと高木さんは一瞬固まったが、そうかといって梶原さんに残りの缶コーヒーを渡す。

「先に潜入して色々やっていたのが僕と高木。それから自衛隊と合流していたんだよ」

そういつと缶を開けて少し、中身を飲み干す梶原さん。

ふーんと僕は唸って、

「それじゃあ、まだ事件で色々なものが霧散している時、ですか」

まあ、そうだな、と言って高木さんが僕の左に座った。

「潜入するのには少し日本警察ではものたりないのでは？」

悪びれもなく僕がそういつと、やはり、

「適材適所ってことだったんだろうよ」

それだけいつてふーっとソファによっかかる高木さん。

多くは語らないのは別に僕に情報を漏らさないためではないだろ

う。僕が核心を突けばおそらく梶原さんあたりが言うだろう。だがそれは僕が核心に踏み込むということであって、「僕のほうの核心」が多少なりとも露見することということだ。

こちらは多少であっても重大な、というぐらい痛い。互いに持っている情報の重さが明らかに僕のほうが大きい証拠だ。どうするべきか。どうされるべきか。

「お前は……、その彩夏つつー彼女をとめるために来たんだろ？」

愛だけのために、ってシェークスピアじゃねえんだから別の目的は？」

「そうですね……」

僕は左を見て、右を見て、正面を見る。二人ともまったく隙はない。油断もない。むしろ警戒を僕と出会ったときから常にしている。本当に警察なのだろうか？　そこだけでいえばプロだ。

だからこそやれる。

「僕は復讐のだけに生きるのであれば、破壊者になればいい。しかしそれだけでは悲しみと恨みしか生まない。ならば革命者になればいい、と先生に教えられたので。好きな人が破壊者ならばそれとめるのは当然だと」

少し沈黙した後に、

「その先生って誰？」

梶原さんがにこやかに聞いてきたので僕もにこやかに答える。

「パークタウン州軍学校の円谷先生とアドニス先生です」

「……！」

「……」

二人が明らかに止まり、僕がそのままにこやかに続ける。

「先ほど高木さんが祐樹の母親を暗殺か？　と聞きましたが、それはなぜです？」

高木さんが止まったまま動かず、

「祐樹の母親をオーストに潜入して『後からくる仲間に支障が来た
さない様先に殺しておく』のが二人の仕事だっ、た」

僕は言い終わると同時に下の歯の裏に仕込んでおいた極細の針を
口から取り出して瞬きする瞬間に、

二人の首に向かって投擲した。

第二章 救われるもの 七

.....。

僕は正面を見てわざと意地の悪い微笑を浮かべ、左を見て、右を見た。

「お二人は……、動きませんかやっぱり」

僕の投擲した針は確かに高木さん、梶原さんの首を狙った物だったけど、直前に手首のスナップで少し軌道修正、当の針は首を通り越して両側の壁に突き刺さっている。ただ針そのものは直径三センチ程度のもので当たったとしても大事にはならない。もちろん、「僕なら今のようにコンクリートの壁に突き刺すぐらい」は簡単だけど。もちろん、こんな程度この二人をやれるとは思わない、思わないからこそ「できる」と確信した。

二人は自分の実力を信じて動かないということ。

ミラーの向こうで一体誰が見ているのか確認しておくことを。

微動だにしなかった二人、右の梶原さんは苦笑しながら松葉杖を持って立ち上がり、高木さんはあーあー、といった感じの顔をしながら座ったままタバコを出す。

目の前のマジックミラーは鏡面が反転して鏡が解け、その瞬間一瞬で透明なガラスにかわった。どうやらボタン1つでマジックミラー内にあるアイトソープの分解構築が出来る技術で透明、不透明ができるやつらしい。高級ホテルや官僚を匿う所で使われていると習

ったことがある。また一回、オーストの巡洋艦内でホログラムの分析で見たことがあったので一応当たりはつけておいたが。

そしてマイクを握り締めたまま固まっているスーツを着た、四十代くらいの男性。僕が針を投擲した瞬間に鏡に反転、『やめ……!』という中途半端な声がスピーカーから聞こえてきた。当の本人はやられたと思っているのか、嵌められたとようやくわかったのか僕を苦々しく味ら見つけており、左の二十代女性は眼鏡越しにそんな男性を冷ややかに見つめ、そしてさらに横の男性は隣の女性と何か会話して知らん振りしている。

僕が動揺を誘ったのはこっちの梶原ら二人じゃなく、あっちの人们、というのはわかっただろう。その中に取り乱すような人がいるのは賭けだったけれども、一応保身のためにあっちの上の人たちは知っておきたかった。もし、自分を責めるような状況になったら誰が一番やりそうか。どちらにせよ交渉の余地はなく、この取調べだけで終わるだろう。

上に誰が関わっているか、その直接交渉が今のタイミング以外ない。

「針ね。ナイフならずにおっかないね」

そう言って笑いながら壁の極小の針を見る梶原さん。毒があるかも、っていうのはわかっていいるのか、触ったりはしない。仕込みなので毒はもちろんないのだけれど。

僕がそれを見て、目を細める。

——銃はいいわ。あなたのナイフよりも人の顔を見なくてすむもの。

そう彼女は言ったけど、僕はもし、やるのだとしたら人を殺すという罪をこの手で実感してながらそれをやりたい。

自分の欲望でその人の人生を終わらせる罪をこの目に焼き付けておきたい、そう言ったが、そんなの偽善よ、とやっぱり笑われた。

結局の所、僕と彼女だけがあそこに残り、研鑽を積んだ。他の仲間、友達はみんなちりじりになってしまっ……。

僕達のことを覚えているだろうか。僕達がもしこうだとしたら、こうだったらっていう絶対に無駄とわかっていた夢物語を言っていた十五歳の当時のことを。

人間というのは一人じゃ弱い、何人集まっても弱いものは弱い。そう悟った子供達は、こうやって分断してまで世界に、国に反抗しようとしている。でも僕にはそんなものは関係がない。ついでで止められればいい。そう思っている。

僕は彼女を止められればいい。

「それで、吉田啓吾一等海佐、佐々木警察庁情報局局长、武藤航空自衛隊情報作戦四課課長。僕を梶原さんの補佐にするんでしょうか？」

「お前さ、少しは自分を律するって言葉、習わなかった？」

横の高木さんが正面を向いたまま言う。

「習いましたよ。戦場では常に冷静であれ、と」

「戦場って……。まだ円谷センサーはそんなこと言ってるのか。もう旧日本軍みてえだな」

「否定はしませんけど。そういうこと本人の前で言っていると半殺しになりますよ」

そういうとむっ、とした感じで高木さんが黙る。

今は三人で警察庁内を歩いている。高木さんに武藤さん。どうやらその場で速攻決まったらしく、僕はそのまま作戦情報四課に就くことになった。鏡越しに見ていると吉田一佐対四人といった感じで見て面白かったが、あっちが折れたらしく、その場で解散して梶原さんは他の人に用事があるとかないとか。

「それよりも、もう少し反応して高木さんとやり合う、っていうのも悪くなかったんですけれどね」

「はっ。カンベンしてくれ、俺はもうデスクワーク組みでお前見たく現役じゃねえんだよ。やったらジリチンで負けるだろうな」

それでも「ジリチン」というところ、それなりに自分に自身を持つているのかただ事実を言っただけなのか。

そうは言ってもと、僕は高木さんの拳と肩、足を見て、

「それって面白いですよ、コマンドーに柔術のような。現在あるどの武術にも当てはまらないものですよね」

ほうと、ガラス張りの廊下を歩きながら前の武藤さんが言う。

「わかるのかそれ。それはその『円谷』がまだ日本にいたとき、開発したもんでまだ使い手は二人、その高木と梶原だけさ」

……はあ…。

「んだよ」

僕がじつとりとした目で見てると高木さんが笑いながら言う。

「いえ、同門なわけですじゃあ」

そうすなりと言うと、高木さんは少し固まって、笑っていいのか、困った表情で漂って、結局はむすつとした感じに収まった。

「同門でもかなり、まあ、事情が違うさ」

事情、か。過去にどうやら僕が親炙できないものがあるらしい。

武道なんてスポーツの延長だと思っていけない僕が何か言ったらただ怒らせるだけだろうな。

そのままロビーから出て、正面玄関から外に出る。

二人が僕のことをどう思っているか少し気になるところだけど、この人たちは「さっきみたい」方法でなくてはなんにも言ってくれないだろうし。そのうち打ち解ける、っていうのも悪くないと僕は思い始めた。

「このまま新宿の隊舎までいくぞ。車回すからすこしそこで待つてろ」

そっいつて武藤さんがまた庁内に消えていく。

高木さんは所謂、と言うかみててもかわるけど、ヘビースモーカーのようでまだタバコをくゆられせながらばーっと空を眺めていた。

僕は随分とまあ、人工密集がすごいな、なんて普通の感想をもちながらこの中核省庁が集まる霞ヶ関のまわりをぐるりと見渡す。

「発展してんだなあ」

実を言うと東京は初めてだ。まだあつちにいた時に起きた紛争の影響で、テロの標的にされたとかでかなりの人口が減少したらしいが。

「でも多いことには変わりないか」

またどうでもいい感想を言つて、せわしく右往左往するスーツ姿の群れをみる。どれもこれも無表情で、なにが自分の使命なのかわかつているのか、それが率直に出た疑問。

将来は自分もあなるんだろうか。社会に取り込まれて、無為に仕事という看板を掲げて黙々と自宅と会社の往復をする日々。それだったら僕は――。

でもここまで泥沼に嵌っている僕が日常に戻れるかどうかと言え
ば……。

そのとき、ケータイが鳴った。マナーにしておいたけど、それでもわかる。

高木さんはちらりとこちらを見てきた。僕は一番近くのビルの屋上を見て、そして、

「すいません、電話です。ちょっとそつちで話してきますね」

高木さんは、おう、とだけ言つて、気づかないのか、それとも振りなのか、よくわからないけどおそらく後者だろうと思って、僕はそこから立ち去りながらケータイを出して、

「彩夏、話したかった」

僕は出るなりそう言った。

『私も。智之』

なんだか、前とは違う。

前はこんな、疎外感を彷彿させるような喋り方をするような人じゃなかった。やはりテロなどという思考が彼女自体を変えたのだろうか。

「今、近くにいるんだろ？ 会って話したい。直に会って話したいんだ。そのためにここまできたんだ僕は」

そう。直にあつて、あの凛々しい顔を見ながら話したい。また対面のビルの屋上を見る。

『話す……ね。もしかしてレアノアのこと？』

「そうじゃない」

僕が少し声を荒げた。あつちも驚いたのか少しの息遣いだけが聞こえる。こんな雰囲気は嫌だ。

「そうじゃないんだ。わからないのか？ 俺は彩夏のためにきたんだ。君のために」

彩夏はまだ何かを図りかねているかのように言葉をださない。

「あれから……あれから俺とシルフィーがどれだけ探したかわかっているのか？ 俺に好きだって言うてくれたことも、一緒に居たいって言ってくれたことも忘れたのか？」

あの時の、僕達は全員で一つだと思っていた。

それが世界の全てだと思って、それでいいとさえ思っていた。事件前の僕と彩夏はそれでいいと、思っていたのに。それなのに。

「……勝手に消えるだなんて、卑怯じゃないか……っ！ 何やってるんだよ彩夏っ！」

胸が詰まる、なんていうのはこういうことをいうのか。

とにかくこの二年で思っていたこと全て彼女に言いたかった。今はどんな様子で、どんな髪型で。そんななんでもない近況を言い合えるような、なんでもない子供でいたかった。それでいいだろうと。もうやめようと彼女に伝えたかった。

『……私も、嫌だった。智之と離れるのは』

静かに、最初の喋りだしとは打って変わって、優しさが籠ったも

のだった。

『今でも確かに智之のことは好き』

僕は少し息が詰まる。

『でも、もうここまで来ちゃったからね。どうしようもないのよ』

「どう……、どうしようもないっ……」

今でも俺も――

「まだ国がどうか言ってるのか？俺たちには確かに憎むべきことだけれど、ここまでなにもかも犠牲にしてまでやることか？」

『その価値が、あるから、やるのよ。価値は誰かが決めるものじゃないわ。自分で決めるもの』

「思い上がりだ。ただの自己満足だよ。価値は周りが決める。彩夏達がなにをやったってテロリストにしか映らない。国がどうか、親がどうか、」

少し、声を落とす。

「少しは……あれから、自分のために生きてみるよ」

今でも俺も――

「俺と一緒に帰って欲しい」

数秒沈黙が続く。彩夏はやっぱりなにか迷っているようで、少しして、

『――またね』

電話が、切れた。

少しケータイを耳から話して、対面のビルの屋上を見る。さつき見えたガラスの光のようなものがなくなっていた。

「くそつたれ……」

そのまま、百メートルほど離れている高木さんを見ると手招きをしていたので、とりあえず歩いて近づいていった。

高木さんは僕のケータイを見て、そして首を傾げながら言う。

「どうだった？」

このぐらいでもう僕は驚かない。

僕は高木さんを見て、

「あまり話せませんでした」

「そうか」

「今でも俺も好きだと言えませんでした」

「そうか」

「……止められませんでした」

「そうか」

高木さんはなんでもないようにそう言つと、さっき僕が見た屋上の上を数瞬、見て、

「ほら、車来たぞ、乗れ」

そう言つて歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2763v/>

風の中から夢の中へ

2011年12月2日07時48分発行